とある記憶の絶対領域（アブソリュート）

悪魔魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある記憶の絶対領域（アブソリュート）

【Ｎコード】
Ｎ７６３１Ｎ

【作者名】
悪魔魂

【あらすじ】
闇夜に照らされるここ【学園都市】
ここでは色々な能力を持った能力者達がいた。
その能力者達のなかの一人、氷宮軌跡（ひみやきせき）は絶対領域という少し奇妙な能力を持っていた。絶対領域の能力が氷宮軌跡にとってどんな能力なのか………。

初めて小説書きました！！　誤字脱字が多数あると思います。それでも一生懸命書いたのでよろしくお願いします！！

一章完結！！！！！！！！

そして二章スタート！！！

絶対領域（アブソリュート）（前書き）

はじめまして！！悪魔魂です。初めて小説かいたもんで変な文章ばっかですがどうか宜しくお願いします！！

絶対領域（アブソリュート）

【学園都市】の路地裏‥　そこでは一人の高校生が逃げ回っていた。
「なんで俺だけいつもめんどい事が起きんだよ」　この高校生、名前は氷宮軌跡（ひみやきせき）。　背は１７０後半、ツンツンしたショートカットの髪、　学生服……とまあ普通？　の格好の高校生だ。

「おらぁぁぁぁ！！！待てやコラっ！！！！」　「ただじゃあすまさねぇぞコノヤロー！！！！！」
彼がなぜ、こんな状況になったかと言うと、それは１０分程前にさかのぼる………

～１０分前～

俺は夜のお散歩をしている途中にたまたまコンビニがあったのでそのコンビニにの中に入った。コンビニの中へ入った俺は一目散に紙パックジュースが置かれているコーナーへと行った。そして俺は運命の選択を迫られた。紅茶を買うか、カフェオレを買うか………。
　これが俺の運命の選択。
「紅茶もいいんだがカフェオレも捨てがたいんだよな～～」
そんなくだらない（他人から見れば）選択をしていると外から悲鳴声が聞こえてきた。コンビニの中から外を覗くとそこには俺と同い年ぐらいの不良達がこれまた同い年ぐらいの女の子一人を囲んでいた。俺は女を汚す男は大っ嫌いだ。コンビニを出て、不良達の側に近寄る。そして…………

「この子が可哀想だろ。イジメは良くないよ？じゃあまたねっ！！」
女の子を連れ去りすぐさま逃走。
「おい！！待てやコラーーーー！！！！！」
「追うぞっ！！！！！」

くっそ~連れてきたはいいがどうすれば…………　「助けてくれてありがとう！！家、ここだから。じゃあサヨナラ！！」
「…………？」
予想外の展開に俺の頭は今、まっ白…………。
目の前にある家が連れてきた子の家だったんだね。偶然だけど良かった！　だけど気になる事が一つだけ残ってる。不良達はどうするの？
考えているとバイクの騒音が聞こえてきた。マズいっ！！！逃げろっ！！！

~現在~

とまぁ、そんな感じでこんな状況。俺はなにも考えがなく、ただただ不良達から逃げ回っていた。
「バイクはちょっと卑怯じゃないのかな~！！！」
後ろにいる不良達にそう叫ぶ俺。
「うるせぇーー！！！！待ちやがれ！！！」
「待てと言われて誰が待つものですか~~！！バーカバーカ！！」
完全に不良達をバカにする俺。長距離走は得意なもんで、結構余裕

だ。しかし、それは俺の欠点でもある。そう、余裕を持って走っていると周りが見えなくなる。つまり今は行き止まりに出くわしている状況。
「やっと追いついたぜこのガキがっっ！！！！！」
あ〜あ〜あ〜あ〜〜〜。　面倒くさい事になったなぁこりゃあ。どんどんどんどん不良達が迫ってくる。
「しかたねぇ、ここで使いたくなかったが……」　「なにするつもりだ？」「ちょっと待ってね！！今君達の頭おかしくするからねっ！！」
そう言って数秒後、不良達の顔が明るくなっていった。
「俺達……なんでこんな所にいるんだ？」
「俺達はボスのペットを探してたんじゃなかったけ？」
「そうだよそうだよ！！！ボスのペット探しだよ！！」「こんな所にいてもしかたねぇ！！行くぞ！！」
そんな話しをして、不良達は帰って行った。
「ペット見つかるといいね〜〜〜！！！」
今のは俺の能力、絶対領域（アブソリュート）で不良達の事情を変えた。　だから不良達はあんなになったんだ。
「疲れたから帰ろうっと」
俺はそのまま家へと帰宅した。俺の能力は使うと結構体力消費するからな〜〜。

絶対領域（アブソリュート）（後書き）

読んでいただけましたか？ はい……そうです。分かる人は分かる最初でしたね。

ではニ話で会いましょう！！

存在消去（デリート）（前書き）

二話目です。

眠いです。

頑張りましたんでどうか見てください。

存在消去（デリート）

第七学区のとあるアパート……

そのアパートの一階にある、１０２号室が俺の住む家だ。今俺は自分の部屋で１人でのんびりテレビを見ていた。

ある理由で一人暮らしなのだが、その理由を話すと長くなるのでやめる。　一人暮らしで寂しくはない。なぜなら、俺の右隣の１０３号室と左隣の１０１号室には親友がいるからだ。

１０３号室には幼なじみで親友の鶫夜雅紀（つぐみやまさき）、１０１号室には同じく幼なじみで、女で親友の篠原美穂（しのはらみほ）が住んでいる。雅紀は背が俺より高く、１８０はある。髪は黒で落ち着いた感じの髪型だ。美穂は背が１６０ちょっとはある。女子にしてはまあまああるほう。髪は茶色が少し混じっていて髪型はショートヘアーだ。

幼稚園の時から今現在の高校までも全部一緒の所に通っている。

俺達３人は何するときも一緒にいる。学校を一緒にサボったり、不良達に俺達だけで立ち向かったりとまだまだあるがこれくらいにしておこう。

とにかく、俺達は仲がイイ。

ピンポーン

俺の家のチャイムの音が鳴り響く。

来たか…………。

「いいよ〜〜！！」

「「あ〜い！！」」

ガチャッ……玄関が開く音。

「「お邪魔しま〜す！！」」

「今日は早かったな！」

「マジで朝からなんもすることないから」

「暇人なんですよ俺達」

今、俺の家に入って来たのはさっき説明した2人、雅紀と美穂だ。

このように夏休み中毎日　暇な俺達は3人で1日を過ごす。言ってなかっが今俺達の高校は夏休み中だ。

3人で集まっても特に何もすることはないんだけどね。

「聞いてくれよ〜。昨日不良達に追っかけ回されて大変だったんだよ〜〜！！」

「それは災難だったね」「んで、行き止まりにでちゃって大ピンチだった所で……」

「所で……？」

「絶対領域(アブソリュート)！！！！」

「やっぱりオチはそれなのね」

美穂は俺の話しをちゃんと聞いてくれているのに　雅紀ときたら俺のマンガを勝手にあさって読んでいる。俺の話しにどんだけ興味持たないんだよ〜〜！！

と、心の中で叫ぶ俺。

「あんまり能力を人に見せない方がいいよ〜」

「そういうお前は人の事を言えるのか？」

「……わっ、私のは事情が違うもん！！」

「お前の自己満足で使ってるだろ」

「うっ……うるさいなっ！！そんなこと言うなら、えいっ！！」

そう言うと俺の着ている服が一気になくなり、パンツだけとなった。

「おっ、おいっ！！！！服をなくすなっっ！！！！！！」これが美穂の能力、存在消去(デリート)だ。

美穂が願った物をある程度の物だけ時間を決め、決めた時間だけ存在を消去できる。

だが、誰の何の存在を消去したいとまで願わなければ、本当にその物が世界から決めた時間だけ消えて大変な事になる。
だから気をつけて使っているみたいなのだが。
「バカっ！！！！早くもどせっ！！！！」
「自然に戻るから大丈夫だよ」
「お前時間を何時間に設定したっ！？」
「限界の２４時間だけど？」
「ふざけんなっっっ！！！」
どうわらコイツは俺に殺されたいようだ。
でもまず服だ。
「おらよっと！！」
俺は服の存在を２４時間だけ消去したという事情を０分だけ消去したという事にして、服を取り戻した。
「あ〜〜あっ！！つまんないっ！！」
「てめぇ、遊んでおいつつまらないとはなんだつまらないとは…！！！！！」　俺達はにらみ合い今にも喧嘩が始まりそうになった。
まあ、毎日の事なんだが……そこで止めに入るのが……
「うるさいから止めろ」　コイツ……雅紀だ。
雅紀はポケットから鍵を　取り出すと、その鍵を俺達の口に向けた。
「……ロック」
「…………！！！！」
「…………！！！！」
俺達は雅紀のロックの一声で声がでなくなった。そう、これが雅紀の能力、鍵閉封鎖（ディーキー）。鍵である程度の物なら何でもかんでも閉めちまうとんでもない能力だ。
「「………！！」」
「聞こえない」
「「…………！」」
ピンポーン
本日２度めのチャイムが鳴った。

「誰か来たぞ」
雅紀は鍵を取り出し俺達の口に向けロックを外した。
「「バカやろーーーーーーーーー！！！！！」」
2人揃って大声で叫んだ。言いたい事は同じだったようだ。
「そんな事より誰か来てるぞ」
「後で殺す」
そう言い残し俺は玄関へ向かいドアを開ける。そこにいたのは黒服の怪しい男だった。
「初めまして。105号室に引っ越して来ました赤井雄大（せきいゆうた）と言います。どうか宜しく。」
「はっ……はい宜しくお願いします」
「では、失礼」
そう言うと赤井雄大と名乗る男は去って行った。 背は俺と同じくくらいでかなりの細身だった。
「誰が来たの？」
「105号室に引っ越して来た人だって」
「そんな人引っ越してた？」
「怪しい」
「まあ、いいか」
俺達は一回怪しむのをやめ、部屋に戻った。
なにかが起ころうとしている。その気持ちで今はいっぱいだった。

存在消去（デリート）（後書き）

色々出て来ましたね。
大変です。

また三話で会いましょう？

武器変換（ビーチェンジ）（前書き）

頑張ってかきました。
どうか見てください。

武器変換（ビーチェンジ）

7月22日………………

今日はうるさいお二人さんが用事のあるという事なんで、久し振りの一人だ。たまにはこういう日があってもいいな、とひたる俺、氷宮軌跡。

俺は寝転がっていた。

ふいに、のどが渇いた。　冷蔵庫を覗きにいく。だが、飲み物がつきていた。

「買いにいくか」

と呟き、自分の部屋にある財布を取り、玄関へ向かう。

靴をはき、コンビニへＬｅｔ'ｓ　ｇｏ！！！

コンビニに着き、俺はまたもや究極の選択を迫られていた。

「くっそ〜〜！！ペットボトルのコーラを買うかそれともオレンジジュースを買うか……くそっ………決められない」

俺が究極の選択を迫られている時に、隣から女の子の呟きが聞こえてきた。

「お茶もいいんだけど、むぎ茶もいいんだよね〜」

コイツ……馬鹿か？

そんなので悩んでいるというのか？（人の事言えない）ここは教えてやらないとな……

「君、お茶買うかむぎ茶買うかで迷うんじゃな…………いよ？」

話しかけた女の子と目があう。この子………　まさか……？

「あっあなたはもしかして、前私を助けてくれたお方ですよね？」そう。俺が話しかけたその子は三日前に俺が不良達にからまれてた子だった。
「ぐ……偶然だね」
「そ……そうですね」
何か話しを作らなくては……
「君、中学何年生？」とっさの質問にビックリした様子。
「私は高校一年生ですーー！！」
「なるほど、高校一年生なんだ～～………って、えぇぇぇぇっっっ！！！！！！」　この子が……高校生…？　見た感じ背は１５０前半で小柄。かなりの童顔で、髪の色は黒で、髪は肩にかかるかかからないかぐらい。
見た目から見ればめちゃくちゃ中学生に見える。「なんで驚くんですか～！！」
ちょっと起こり気味だ。「ごめんなさい。あまりにも中学生に見えたもんで」
「あなたは私と学年が一緒ですよね？」
「まあ、そうだけど……なんで？」
なんで知ってるの？
「あなたは私と同じ高校に通っているでしょ！！」「………えぇぇっっ！！！！！！」
こんなやつ俺の学校にいたか！！！？？？
全然全く分からんぞこんなやつ！！
「不良達から助けてもらった時から分かってましたからっ！！」
「改めてごめんなさい」「許さない」
「へっ？」
「許さない。からあなたをボコリます」
「だから、へっ？」
言っている意味が分からない。俺を……ボコる？「ちょっとついて来て下さい」

「えっちょっと待って……」
俺の手は強引に彼女に掴まれた。
そして、どこかに連れて行かれた。

連れてこられた場所というのは不思議な廃工場。「私と戦って下さい」
話しが急すぎる。なぜ、いきなり連れて来られてなぜ、戦いを挑まれる。「戦わないのならボコります」
「分かった分かった。戦ってあげますよ」
「ありがとうございます！！これでボコれる！！」
戦うを選ぼうが選ばないが変わらなかった。
相手は女の子だ。手加減してあげないとね。
てか、なんで俺と戦おうなんて言ったんだろう？まあ、いっか。

「じゃあまずは手始めにコレをっと」
彼女は鉄パイプを手に取った。そして
「それっ！！！」
の一言で鉄パイプは槍に変わった。
「………えっ……能力者なの？」
「そうだよ」
「あっ……あはっ……あははは……聞いてねぇよ……」
そして彼女は槍となった鉄パイプをこちらに投げつけてきた。それをとっさに横にかわす。
「君、今俺の事を本気で殺そうとした！？」
「なに言っているの？当たり前じゃん」
これは少々まずいことになったぞ……。
「ニ本目行くよ～」

「バカーーー！！！！！止めてーーーーー！！！」
槍をまた横にかわす。
「なかなか当たらないな〜〜。というか早く使ってよ〜〜能力をさ〜」
「誰が使うかっ！！！」
「じゃあ無理やりにでも出さしてあげる！！！」
次は残っている鉄パイプを全部使い、大きな大剣を作り出した。
「これでぶったぎってあげる」
長さ7メートルはあろうかという大剣をこちらに向けて振ってきた。
さすがにこれは避けきれない。仕方ない、使うか。

大剣が俺を切り裂く寸前で俺は大剣の事情を変えた。鉄パイプで出来ているのではなく、水で出来ているという事情にした。
すると大剣は俺にあたる寸前で水となり、地面にこぼれた。
「それが君の能力か。強いね〜！！」
「絶対領域（アブソリュート）だ。お前の能力はなんだ？」
「私の能力は武器変換（ビーチェンジ）。あらゆる物を武器にできる。こんなふうにね！！！！」
と言うと彼女はそこにあったドラム缶を長く、鋭度のいい槍にした。
「お前ドラム缶を槍にしてしかも片手で持って重くないのか？」
「武器変換は変えた物の重さを変えられるの」
「んなのありかよーー！！！！」彼女がドラム缶を武器変換させた槍を投げつけようした。

だが、まだまだ甘いな。
「んっ……なにこれ……体が……動かない…！！！」
「やっといて良かったぜ〜〜」
安心する俺。
「……何をしたの？」
「俺が自分の能力名を言った時からお前の能力の説明している間に

出した」
「いつの間にそんなものを……？」
「そう…俺は【事情】だけじゃなく【領域】も操れるんだよ。今使った技は名付けて【死の領域(デスゾーン)】って言うんだ。その領域にいる者の動きを封じられる」
「くっ……私の負けです……」
一応勝った？みたいだ。「なんでいきなり戦いたいなんて挑んだの？」
「あなたの実力が見たかったから…………」「そうっすか。お前の名前は？」

「白戸翔子(しらとしょうこ)。」

「俺の名前は「言わなくても分かる」
んっ！！！………なんで名前を知っているんだ？
「なんで俺の名前分かるんだ？？」
「色々あるんですよ」
気になるな。
まあいいか。
「分かったよ……。翔子ね、覚えておくよ」
「うん、宜しく」
廃工場を後にしようとしたとき俺は妙な感覚におそわれた。この廃工場……俺は知っている？
俺は何か大切な事を忘れているような気がする。まるで記憶の一部が丸ごとなくなっているような感覚だ。
まあ、いいか。
いずれ思い出すだろう。そう思い、俺は廃工場を後にした。

武器変換（ビーチェンジ）（後書き）

また、変な子が出て来ましたね〜〜〜。

ではまた四話で〜

鍵閉封鎖（ディーキー）（前書き）

四話目です。
こんな小説を読んでくれる人はいるんでしょうか・・・
しかも今回は長いです。　どうか飽きずに読んで下さい。
ではまた後書きで。

鍵閉封鎖（ディーキー）

「なんであんな事に時間を潰さなきゃいけなかったんだろうな〜。
軌跡（きせき）や美穂（みほ）と遊んでれば良かったな〜〜。」

めちゃくちゃ後悔する俺、鶫夜雅樹（つぐみやまさき）。

俺に何があったかというと、今日の朝の出来事…………

７月２２日

今日はある用事があり、軌跡達とは遊べなかった。

いつもならこの時間帯にはアイツの家にいるだろう。

自分の家にいる時間より　軌跡の家にいる時間のほうが長い。

軌跡の家が俺達の家みたいなもんだ。

俺に親はいない。

俺の目の前で交通事故に会い、二人同時におだぶつだとさ。

その事故があったのは俺が2歳の時らしい。

全く持って俺自身はそんな事故の事を覚えていないんだがな。

そして俺は親の残した金でこのアパートに引っ越してきた。
5歳の時だ。

もちろん5歳児が一人で暮らしていけるはずかない。
だから俺は一人て生きていけるようになるまで軌跡の家に住ませてもらった。
そん時には軌跡の母親が面倒見てくれた。

だが、今はいない。

俺が引っ越して来たときには軌跡と美穂がもう住んでいた。

美穂の事を知ったのは、軌跡の家に住み始めてから数日たっての事だった。

まだこの時の美穂はかわいかったかもしれない。（今はどうだか……）

俺は軌跡と美穂と同じ幼稚園、小学校、中学校、高校に通った。
アイツらとはずっと一緒だった。
俺はコイツら無しに生きてはいけない、と思ったくらいに。

話はかわるが、俺が能力を使える用になったのは１２歳の時だった。

突然ズボンのポケットに違和感を感じ、手を入れてみるとそこには手のひらにのるぐらいの鍵が入っていたのだ。

最初見たときは家の鍵だと思った。
だが家の鍵は普通に持っている。高校生にもなるとその鍵の事と使い方を知っていた。
美穂も軌跡も俺と同じ歳の時に能力を身につけたと思う。

っとひたってしまったな。

「そろそろ時間かな」

俺は用意をし、約束をした場所へと向かった。

その場所とは、近くにある公園のことだ。

そしてその公園には俺をここへ呼んだある、女子高校生がいた。

その女子のもとへと向かう。

公園にある時計を見る。約束の時間ピッタリだ。そして俺をここへ呼んだ女子高生見つけた。

「あっ、あの今日はお忙しい中私なんかにつきあってくれてありがとうございますっ!!!!」

その女子は頭を下げる。

「いいよいいよ別に。こっちも暇だったから」

まあ軌跡達と遊びたかったけどね~。

「んで、何の用?」

「え~っと……今日は雅樹君に言いたい事があって呼んだの………」

「言いたい事って何?」告白か?

まあ珍しい事じゃあないけどね。

「実は私……あなたの事が……その…………………あの………
………

だあぁぁぁぃぃぃ嫌いなんです！！！！」

「…………ん？」

今なんて言った？
今なんて言った？
聞き間違えかな？
聞き間違えであってほしいな？

「だから今日はあなたを殺しに来ました〜〜！！！」
どうやら聞き間違えではなかったらしい……。

そうか嫌いだから殺しに来たのか…………ハァ〜………って

「何でそうなるの？」

「だから言ったじゃぁないですか。あなたが嫌いで殺したいから今日はあなたを呼んだんです。【愛の告白】でもされると思ったんですか？すみませんね、【あなたを殺す宣言】で。今日はあなたの命日ですよ。雅樹君」

色々喋られて困る。
まだ全て頭に入りきれていない。
というかなんで俺を殺しにきた？俺はコイツになにか憎まれるよう

な事をしたか？全然覚えがないぞ……う～～ん。

「私があなたを嫌い……いや、殺したい理由、分かります？」

「全く持って全然分かりません」

嫌いな理由を教えてくれるなら教えてもらおう。

「私はあなたをずっと影で見続けていました。そう、私はあなたの事が好きだったのです。あなたの勉強している姿がとてもカッコよくて………。でもあなたいつもいつもいつも篠原美穂の側にいる！！あなた達は付き合っているの？あなた達はどういう関係なの？まあどうでもいいんですが、あなたは私を見ていればいいんです！！！私だけを見ていればそれでいいんです！！！！それなのにあなたは全然私に振り向いてくれないっっ！！！！！だから私はあなたが嫌いになりました！！あなたを殺したくなりました！！あなたを殺した後に篠原美穂も殺します！！」

う～～～ん。

困ったなぁ～～。

かなり頭がイってるみたいだなぁ～～こりゃあ。

「一つだけ言っておくよ」

俺はポケットから鍵を取り出し手でもて遊んだ。

「俺は君のものじゃない、白戸癒亜（しらとゆあ）」

「大丈夫です……。今から私のものにしてあげます」

そう言うと癒亜は腰からサバイバルナイフを取り出すと、手で持て遊び、俺に投げつけた。

「おおっと……危ないなぁ……」

俺は投げつけられたサバイバルナイフをかるくかわした。

「私の能力……教えてあげます」

その言葉から悪い予感がしたため、俺は後ろを振り向く。

予感的中。

さっきかわした筈のサバイバルナイフがこちらに向かいまたとんでくる。

「なんだよっ！！またかよっ！！」

もう一度同じ様にかわす俺。

「私の能力……わかったかな？」

「あぁ……大体な……」

「私の能力は武器操作(ビーコントロール)。あらゆる武器……いや、あらゆる物を自分の思うがままに操れる能力。まぁ操る物にも限度があるけどね」

やっぱりか………癒亜は今このサバイバルナイフを操っているのか。

戦うか……。
だが、俺の能力は公園じゃぁかなり無力だ。

俺は全力で走り、公園から出た。

「逃がしませんよ？私があなたを殺すまで！！」

さあ〜〜て、あそこに行きますか。

あそこと言うのは、俺と軌跡と美穂が小学生時代に作った秘密基地だ。

秘密基地というが実際は廃墟と化した家を丸ごと秘密基地にした。

だからかなりデカい秘密基地だ。

戦えるスペースもある。それに何より俺にプラスしかない場所だ。

「つっ……ついた！！」

俺はようやく学園都市の路地裏にある秘密基地についた。

「逃がしません」

やっぱりまだ追ってきてやがる。

急いで秘密基地の中へと入る。

「ようやく追い詰めました……」

コイツ……こんだけ走ってなんで息切れてないんだよ……化け物か……おい……

心の中で呟いていると、さっきのサバイバルナイフが襲いかかってきた。

それをまたまたかわす。

そしてかわしたバイバルナイフの方へと目を移す。

「……甘い」

グシャリ………

「そんな……馬鹿な………」

背中をみるとサバイバルナイフが刺さっていた。

「今サバイバルナイフはこっちに……………………っっ……！！！？？？」

襲いかかってきたサバイバルナイフの方をもう一度見る。
するとサバイバルナイフがユラユラと浮いている。

「誰が一つの物しか操れないなんて言ったかな？」

「そういう………ことか……！！」

「私は同時に3つまで操る事ができるの。すごいでしょ〜〜！！！！！」

迂闊だった。

考えてみればそうだ。
物を操れるなら一気に複数の物も操れるという可能性もあったはずなのに……。
「んで、何でまだ立っていられるの？」
「これくらいじゃぁ……まだ……ぶっ倒れねぇよ」
強がった。
立っているのはかなりギリギリだ。足元がふらつく。
今にも倒れそうな俺。
「じゃあ、あと二本刺したら倒れてくれるかな？」
そう言うと浮いているサバイバルナイフと癒亜の手から投げられたサバイバルナイフが俺に向かってきた。
つまり左と右の両方からサバイバルナイフが襲いかかってきた。
「図に……のるなっ！！！」
俺は二本ともよけた。
どうやら操っているぶん一定の方向にしか飛ばないようだ。
「まだ動けるの？」

死への恐怖のおかげだろうか……自然と体が動く。背中にサバイバルナイフが刺さっている事なんて忘れてしまうぐらいに。

ヤツのところへと突っ込む。　俺の能力は近距離じゃないと使えない。

そして右手にある鍵をヤツに向ける。

「………ロック！！！」

カチャッ……

ロックの音と共に癒亜の動きは止まった。　それと同時にサバイバルナイフもカコン、と地面に落ちた。

「ハァハァ……俺の勝ちだな……癒亜」

「完敗だわ………」

俺は背中に刺さったサバイバルナイフを抜く。
グチャッ、という音がしたが気にしない。
血がポタポタと落ちる。

そして癒亜のロックを外す。

「えっ……なんでロックを外したの？私はあなたを本気で殺そうとしたのよ！！！？？？なのになんで………」

「俺が……悪いんだろ……？」

俺は仰向けに地面に倒れる。

「……そっ、そんな……」

「憎いんだろ？……今なら楽に死ねそうだ。はよ殺せ」

「そんな事……できない」

「ふふっ……馬鹿なヤツ。せっかくのチャンス……逃すなんてなぁ……」

「私やっぱりあなたの事が好き……大好き……だから……だから死なないで……！！！」

俺の頬に一粒の雫が落ちる。

「なに泣いてんだよ……俺を殺そうしたヤツ……に泣かれるなんて……初めてだ……」

「……だって私のせいであなたが……あなたが死にそうなんだもの……」

あ〜〜あ。

もうダメだ……意識が遠のいていく……。

それから俺は病院に送られて緊急手術をした。

手術中はずっと癒亜が手術室の前にいたという。
手術が終わり、意識が戻ると目の前に癒亜がいた。
癒亜はいきなり俺に抱きついてきた。

「良かった……本当に良かった」

俺は顔が赤くなるのがわかった。
なんせ美穂にしか抱きつかれたことがなかったから。

手術が始まったのが午前10時頃で終わりが午後2時、そして俺は3時間で意識を取り戻し、午後6時には病院をあとにした。

看護婦さんがなんだかゴチャゴチャ言っていたがそんなのは気にしない。
そして俺はアパートへと帰った。

――現在――

コレだけの事が今日1日だけであったのでダウン中の俺。

「こんな事になるんだったらやっぱり軌跡と遊んでれば良かったな……」ピンポーン

と家のチャイムがなる。
軌跡が来たのかな？

でもこんな時間に？

俺は玄関を開ける。

「こんばんは〜雅樹君！！元気？」

「なんで閉めるのよ〜〜開けてよ〜〜」

俺は玄関を閉め固くロックをかける。

バンバンバンバンバン

と玄関を叩く音が鳴り響く。
さすがに近所迷惑になるんで家に入れてあげた。
「わぁ〜雅樹君の家って意外に綺麗なんだね〜〜」
「汚いイメージがあったのか………くそっ……」
俺は小声で呟く。
「んで、なんで来たの？結構な荷物だよな……それ……」
癒亜は大きなバックを2つも持ってきていた。

嫌な予感。

「あぁ、忘れてた。今日からここに住む事になりました！！宜しくお願いします雅樹君っ！！」

予感的中。

「おい…待て……待て」
「……ん？？」
「……『ん？？』じゃねぇよ！！話しが急過ぎる！！」

なんで俺を殺そうとしたやつと一緒に暮らさなきゃいけねぇんだよ！！

「病院から帰った後私は雅樹君が心配で心配で、だから私と暮らして！！」
「だからなんでそうなんだっ！！」

「………ダメなの？」

そんな捨て猫みたいに目をウルウルさせても無駄だっ…………多分。

なんでだろう。
周りに散らばったたている漫画三冊ほどが宙に浮いている気がする。
そして今にも襲ってきそうだ。
「分かった分かった！！！一緒に同居していいから止めて！！その

漫画で俺を叩こうとしないで！！」
「やったぁっ！！」
癒亜は無邪気に笑った。　その笑顔がなんだか可愛かった…………
…………
なんて思っちゃダメだっ！！
「しっかりしろ俺っ！！！」
これから大変になりそうだ。色々とな…………

鍵閉封鎖（ディーキー）（後書き）

いやぁ～～ですね～～、　この話しは本来は鍵閉封鎖（ディーキー）の能力を説明しようと考えていたんですけど、なんだか話しを書いているうちに脱線していってしまいこんな風になってしまいました。

どうかお許しを。

鶫夜雅樹（つぐみやまさき）のキャラがかなり崩れました。すみません。
これからはちょこちょこ雅樹君と癒亜（ゆあ）ちゃんのラブラブな所が出てくると思うので宜しくお願いします。

四話を長く書いてしまいすみませんでした。

そして長い長い後書きを読んでいただきありがとうございました。

ではまた五話で会いましょう。

虚無反転（ゼロリバース）（前書き）

いや〜〜五話目です。
自分で言うのもなんですが頑張ってます。

虚無反転（ゼロリバース）

7月22日

私（篠原美穂）は学校に用があり、今日は二人と遊ばずにいた。

「なんで補習なんてあるのかな〜〜〜。面倒くさいだけじゃん」

『学習室』と書かれている教室のイスに私は座っていた。
私が学校にいる理由。
さっき言ったけど補習だ。
そう。
私は軌跡と雅樹よりバカだからここにいる。
普通、男子が補習というイメージがあるが残念ながら女子が補習を受けている状況にある。

ガラガラガラ

先生が教室に入ってくる。

「は〜〜い二人とも〜！！今日は夏休みなのに補習に来てくれてありがとね〜〜！！！」

出ました。
最悪教師、希谷佐江子。
私の大嫌いな先生だ。
髪は長く背中まであり、髪の色は茶色。
みんなは美人教師と言うが私はそうは思わない。

「今日の補習者は〜っと！！篠原美穂さんと緑誠夜くんですね？？」

「はい。篠原美穂です」
「………緑誠夜です…」
「よーし二人共！！今日は楽しく補習やろうね〜〜！！！」

ウザイ。
ウザすぎる。
だから嫌いなんだよこの女は！！！顔を殴ってやりたい！！
殴りたい気持ちを抑え、ふと隣の席にいる緑誠夜？を見る。

この子は全然知らない。今日初めて知った。

髪は落ち着いた感じで、前髪が長くて目を隠している。

髪の色は名前に入っている緑。

「それでぇ〜〜今日の補習内容なんだけどね〜〜」

早く言え。

イライラして机を蹴飛ばしそうになる。

「二人で戦ってもらいま〜〜す！！」

「…………へ？」

私が………この人と…………戦う…………？

隣の緑誠夜も驚いている様子だ。

「それが補習ですか？」

「そうだけど…………何か不満があるの？」

やったぁぁぁぁ！！！！！！

心の中で大いに喜ぶ私。そんなのめちゃくちゃ簡単じゃ〜ん！！

無駄にプリントをやらされるより楽じゃん！！！

「負けた方はペナルティーとして、プリント１００枚とこの補習のレポート５冊分ね〜〜〜！！！！」

そんなにペナルティーってキツいのっっ！！！！？？？？

「分かったかな〜〜〜〜二人共？？？」

「………はい」

私は仕方なく返事をする。

「はい」

緑誠夜も返事をする。

「じゃあ決着ついたら職員室に来てね〜〜〜！！じゃあ頑張ってね〜〜」

先生が教室から出て行く。「まあ、とりあえず始めましょうか。私の名前は篠原美穂。１年５組の生徒です」

まずは自己紹介からだよね。

「……僕は緑誠夜。1年1組の生徒です」

やっぱり分からないな～～この子。

クラスを聞いてもピンとこない。

まあ、いっか！！

「よーし、じゃあ始めようか！！」

「宜しくお願いします」

「女だからって、手加減無しだからね」

「最初からそのつもりです」

そして何を目的としているのか分からない補習が　始まった。

先手必勝。

「とうっ！！！」

跳び蹴り。
私は最初から能力は使わない。というか私の能力は戦闘むきじゃない。
だからほとんど体術を使う。
その跳び蹴りをなんなくかわす緑誠夜。
かわされたので緑誠夜がいた場所にある机に跳び蹴りをしてしまった。

バゴォォォォォン

机がぶっ壊れる音。

「………すごい脚力ですね………」

「まあね」褒められる事は嫌いじゃない。

「……でも女性が足をあげて跳び蹴りなんてするものじゃあありませんよ………」

「なんで？」

「……水玉模様……」

私はそれを聞いた瞬間、一瞬で顔が赤くなった。

「どこ見てんのよーーーー！！！！！」

今度は力任せに殴りかかる。
だがそれは片手で受け止められる。

「……あなたが見せてきたんでしょう？」

「うるさーーい！！！」

怒りと恥ずかしさで力がみなぎってくる。

「………よっと……」

緑誠夜が片手で止めていた私の拳を離した。

「わあぁぁぁ！！！」
いきなり離されたため前に体重がかかり、バランスを崩す。

ドガァァァン

机と私のおでこがぶつかる音。

「………君……おでこも凄い力があるんだね」

おでことぶつかった机を見てみると、なんと真っ二つに割れていた。

そう、私はかなりのバカ力を持つ女子高生なのだ

「痛ぃ！！！よくもやってくれたわね」

「……机を真っ二つにして痛いで済むんだ………しかもおでこかすり傷しかついてないし………」

緑誠夜は苦笑いしている

「私の能力…………見たい？」

「………それは見たい………」

「じゃああんたの能力見せてくれたら見せてあげるわよ」

「……じゃあ見せてあげるよ………」そう言うと、机に置いてある鉛筆を手に取る。

「……ここに鉛筆がありますね……？」

手のひらにある鉛筆を指す。

「……そして一回握ると、木のもくずに」

言った通り、一回握って　手を開くと鉛筆の姿は無く、木のもくずがそこにあった。

「……そしてもう一回握ると…………」

そしてもう一度握り、また開く。

「……鉛筆に元通り」

木のもくずは鉛筆の姿に戻った。

「なるほど………それが君の能力か………」

「……虚無反転（ゼロリバース）。物を作る前に戻す事ができる」

「見せてくれたから私の能力見せてあげるね」

私は緑誠夜が今、手に持っている鉛筆を消したいと願った。

すると、

「……鉛筆が……無い…………ズボンも無い……」

ついでにズボンも。

パンツだけとなった股関節に思いっきり蹴りを入れる。

ノックアウト

緑誠夜は床に倒れ込んだ

「私の勝ちね！！」

私は不意打ちが大好きだ

「これが私の能力、存在消去（デリート）」

「…………………」

能力名を言ってもまともに聞ける様子じゃぁないけどね。

緑誠夜を引きずり、職員室に連れて行く。
私にとって男一人職員室に連れて行く事なんて軽い事だった。

「せんせ～～い！！補習終わりました～～」

職員室の中から先生がこちらに来る。

「終わったのね……ってなんで誠夜くんはそんな所を手で抑えているの？」

「色々あったんです！！それより帰ってイイですか？？」

「いいわよ～～！！誠夜くんはこれからプリント地獄ね～～」

なんだかんだで、
私は学校を後にした。

――――――――――

同時刻とある路地裏――

「おい！！お前っ！！俺達がｇｅｔした女を奪うなよ！！！」

そこではとある男子高校生が二人組の不良に絡まれていた

「そうだそうだ！！！俺達の女だ！！！」

「誰がお前の女だって？」

不良達は今にも男子高校生に襲いかかってきそうだ。

男子高校生はその女に小さい声で「下がれ」と言う。

「こいつは俺の妹だ。手出しはさせねぇ」

そして男子高校生は不良達に手をかざす。

かざした手を見る不良達。

「なにが俺の妹だ！！！」

「シスコンかテメーは！！？？…………ん…………なんだ………
これは………！！！！」

不良達が騒ぎ始めた。

「なんなんだこりゃあぁぁぁぁ！！！？？？」

不良達が見ている物。
それは幻覚。
男子高校生が見せた幻覚。

「そこで一生幻覚見てろ」

「うわわわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

もう不良達は周りの声なんて何も聞こえない。

「あと、最後に言っておく………」

その男子高校生は妹がいる前で大胆発言をした。

「シスコンで悪いか？」

不良達にそう言い残し、その場を立ち去る男子高校生。

「行こうか、美遊（みゆ）」

いきなり男子高校生に抱きついて来る、妹。

「やっぱりお兄ちゃんの能力凄いね！！！壮絶幻覚（グロリア）だっけ？」

嬉しそうな顔をする兄。

「覚えててくれたんだ。めちゃくちゃ嬉しいよ」

抱き合う兄と妹。
そして体を離す。

「お兄ちゃんね、面白い人達を見つけたんだ」

兄の顔にさっきの笑顔は無い。

「だあれ？」

興味津々に聞く妹。

「仲良し三人組」

「三人組って誰と誰とだあれ？」
可愛く聞いてきた妹に思わず抱きつこうとしてしまう兄。

「軌跡、雅樹、美穂って言えば分かる？」

「あぁ～～！！！あの人達か～～！！！確かに面白そう！！！」

「だろ？あいつらで遊ぶよ」

「頑張ってねお兄ちゃん！！！」

再び抱きつく妹。

「頑張るさ。じゃあ今日は家に帰ろうか」

髪を撫で妹と手を繋ぐ兄。

「うんっ！！！」

男子高校生とその妹は真っ直に家へと帰っていった。

帰り道…その男子高校生…………いや、赤井雄大（せきいゆうた）は悪意に満ちた顔をしていた。

虚無反転（ゼロリバース）（後書き）

見てくれた方々！！

きっとみんな思ったと思います。

題名あんまり関係ねぇ～

って！

赤井雄大が動き始めましたね。性格気持ち悪いですね。

感想くれると嬉しいです。励みになります！

では六話で会いましょう

普通日常（フリーデイ）（前書き）

いや～六話目です。

色々な能力の詳しい説明を全然してないのでまた後ほど書きますんでよろしくです。

普通日常（フリーデイ）

７月２３日

午前１０時………
俺は起床する。
夏休みに起きる時間はだいたいこんなもんだ
歯を磨き、顔を洗い、パジャマから服へと着替える。

「そろそろあいつらが来る頃だろ」

と独り言を呟く。
すると今言った通り、あいつらが来た。

ピンポーン

「はいは～い。今行きますよ～～」

玄関を開ける。
そこにはいつもの二人がいた…………と思ったが　雅樹の隣には美穂ではない女の子が立っていた。その女の子の顔に凄く見覚えがある。

「何で雅樹と一緒にいるの？」

思わず聞いてしまう俺。　そう、その女の子は昨日いきなり何だか分からないけど俺に勝負を挑んだ子だった。

「軌跡……知ってるのか………コイツの事？」

「私はこんな人全然知らないんですが？」

とぼけてるのかな？

というかなんでさっきから雅樹の腕にひっついてんの？どういう関係？

「まあいいや。一回あがらせてもらうぜ」

と言うと雅樹とその腕にひっついてる昨日の子？　は玄関をあがり、俺の部屋へと移動した。

冷蔵庫からコーラを取り出し、出してあるコップにつぐ。

「よし、紹介する。俺の腕にひっついてんのは昨日、色々な事があって俺の家に住む事になった白戸癒亜だ」

「初めまして。昨日雅樹くんのお嫁さんになりました、白戸癒亜です」

人違い……？いやでも絶対昨日の子だよな………やっぱり人違いなのか…………？

「てかいつ式挙げたの？聞いてないよ？俺も呼んでくれれば良かったのに」

「軌跡……まともに受けるなよ………嘘に決まってんだろ。癒亜もそういう冗談を言うな」

「ごめんなちゃい」

「……全然……可愛くないぞ……」
雅樹が珍しく赤面だ。
てか今までコイツの顔が赤くなった事があったか……？　まあ、いいや。
「もしかしてなんですけど……まさか昨日あなたが会った子は、翔子って名前では？」
「なんで分かるの？」
やっぱり、という顔をする癒亜という女の子。
「……その子……私の双子の妹です」
双子の…………妹？
なるほど……そうか、そういう事だったのか！！！昨日会った翔子って子はこの癒亜って子の双子の妹だったのか！！！
そうなればつじつまが合う。
「納得いった。ありがとう」
「どういたしまして。ところで雅樹くん！！今日はこれからどこに行く？」
双子の事には納得いった……だがこいつらの関係に納得いかない。
なんで雅樹がこんな美少女と一緒にいるんだ？
「今日は１日ここにいるよ」
「えぇ～～それじゃあつまんない～～」

癒亜の膨らんだ胸が雅樹の腕にあたる。
「バッ……バカッ！！そんなに胸近づけんなって！！」
「じゃあどこかに連れて行ってくれる？」
雅樹の顔と癒亜の顔、距離わずか数センチ………　癒亜の胸が雅樹の体全体にあたっている。
雅樹、失心状態になりかける。

「わ……わっわっ分かったから、顔をはなして！！！胸を体からはなして！！！」

「どっか連れて行ってくれるの？」

「連れてく連れてく！！」
「わーい！！やったぁ！！」
意識を失い、倒れる雅樹　無残にも鮮やかな赤色をした鼻血が雅樹の鼻から出ていた。

「雅樹くん！！？？雅樹くんしっかりしてっ！！！」

こいつら……朝っぱらから見せつけやがって……雅樹が羨ましすぎる。

ピンポーン

家のチャイムが鳴る音。
「どうぞ～～」

玄関から入って来たのは

「二人共、元気？」
美穂だった。
だが美穂は異様な光景を見る。
知らない女の子がいる。　雅樹が鼻血で倒れているそして知らない女の子が倒れている雅樹に何か言っている。

「何これ？」

美穂は今軌跡の家で何が起こっているのか全然理解できなかった。

俺は美穂にいままでに部屋であった出来事を全部話した。

「なるほどね～～この癒亜って子が雅樹のお嫁さんね～～」

何か説明をミスったようだ。
まあいっか。
言い直すのも面倒だしな
「………はっ！！」

雅樹の意識が戻る。

「雅樹く～～ん！！意識が戻ったんですね～～！！私心配で心配で」

お前がやったんだろ
と、ツッコミたくなる。
そして雅樹に思いっきり抱きつく癒亜。

「んだから胸がっっ！！胸があたってるってっっ！！」

「一生放しませんっ！！」

またラブラブしちゃって………ん？
隣から凄まじいオーラがでている。
ふと、隣を見るとともの凄い怒りのオーラをまとった美穂がいた。
「私の前で………イチャイチャイチャイチャイチャするなぁぁぁっっっ！！！！！」

美穂さんかなりお怒りのようで
美穂は癒亜に蹴りを入れようとする。
だが、
癒亜は自分の能力の武器操作で俺の部屋に散らばった漫画を使ってガードした。
もちろん、美穂に蹴られて原形を保てる物はほとんどない。

「いきなり危ないじゃないですかっ！！！」
「お前が私の前でイチャイチャするのが悪いのよっ！！！」

女ってコエ〜〜
改めて思った。

………って美穂が破壊した漫画………まだ読んで…………………ない…………
「てんめぇ、よくも俺の漫画壊してくれたなコルゥゥアアア！！！！！！まだ読んでねぇんだぞ！！！」

「そんなのあの女に言えばいいじゃないの！！！！」
「実際破壊したのてめぇじゃねぇかよ！！！！！」
「あんだとぉぉぉ！！！？？？」

喧嘩勃発
だが今回の喧嘩はちょっと違う。
この喧嘩をとめる奴がいない。
いつもは雅樹の役割だがその雅樹はまたノックアウト中だ。
「癒亜！！こんな所にいたのね！！！帰るわよ！！」
「なんで翔子がここにいるのよ！！！！」
「そんな事どうでもいいから帰るわよ！！！！！！！」
「かえ～らな～い－－－－！！！！！！」
「意地でも連れて帰る！！！」
「かかってきなさい！！！」
大乱闘
Ｌｅｔ'ｓ　ｓｔａｒｔ！！！

３時間後――――
３時間にも渡る大乱闘は終わった……………。
俺の部屋はもうボロボロだ。

何でだろう……この大乱闘が始まる時、もう一人参加者が増えたような…
周りを見渡す。
立っているのは俺だけ。　そしてさらに見渡すと同じ顔が2つある。
幻かな?
目をこすり、もう一度見る。だがやっぱり同じ顔は2つあった。
「なんで翔子がここにいるんだよ………」
双子が並んで倒れている不思議な光景だ。
数分後………
みんな意識をとり戻し始める。
「なんで君がいるの翔子!!!」
「家出した瘉亜を探していたら凄い賑やかな声が聞こえてそこに行ってみたらこのありさまで、でもそこに瘉亜がいたから私は瘉亜を連れて帰ろうとしてこのありさまってわけ」
「長い長いご説明ありがとう」
「私は帰る気ないから」
「絶対連れて帰る」
「イヤ」
「嫌じゃない」

「兄弟喧嘩はよそでやってくれ」

「「あんたは黙ってて！！！！！」」

うずくまる俺。
やっぱり女は怖い。

「雅樹くん帰りましょう」

「あっ、あぁ」

「癒亜！！今日は帰るわ。でもまた来るからね！！！」
「はいはい」

「わたし帰って寝るわ」
「じゃあみなさん！！さようなら～～」

みんな家に帰ったようだ　さっきとは違く、めちゃくちゃ静かになった。
今でも雅樹が羨ましくてしかたがない。

「ど～れ、みんな帰ったから夕飯の買い出しにでも行くか～～」

俺は家を出て、近くのスーパーマーケットに行くことにした。

スーパーにはたくさんの人がいた。

「さ～て今日の夕飯は何にすっかな～」

とか言いながら野菜が置いてあるコーナーに行く
「にんじん、玉ねぎ、大根となすにかぼちゃっと」

適当においしそうな物や安い値段で買える物があったらついカゴに入れてしまう悪いクセ。
これで結構食費に困る時もしばしばある。

レジに行き、会計を済ませて店を出る。
ゆっくり家へと帰ろうとしていた。

いきなり誰かに背中をツンツンとされた。
後ろを振り向くと、小学生？と思われる少女がそこにはいた。
その少女は俺と目があった瞬間に大声で

「軌跡みっーーーけ！！！」
と叫んだ。
この子なんで俺の名前を知っているんだろう？

「軌跡どこに行ってたのーーー？ずっと心配だったんだよーーー！！！！」

「君……なんで俺の名前知っているの？」

綺麗な黒髪で肩に掛かるか掛からないかぐらいの髪の長さの少女は不思議そうな顔をしてこっちを見ている。

「えっ………私の事……忘れちゃったですか……？」

忘れた？

俺はこんな子知らない。　初めて出会った子だ。

「軌跡は数年前まで――――――だったですよーー！！！」

ん？
なに？
大事な部分が聞こえなかった。

「だから軌跡は！！！！」

キーーーーーーン

頭が凄く痛くなる。

「うぅっ……うわぁぁぁぁぁ！！！！！」

色々な物が頭に流れ込んできた。
痛い、痛い、痛い！！！！！
頭が……頭がっ！！！

そして俺は頭を抱え倒れ込んだ…………………

□■□■□■□■□
「あぁ〜〜あ、倒れちゃったよあの子」

「やっぱり未完成だったのね」

□■□■□■□■□
「あんたの子だろう！！！親がちゃんと責任をとるべきだっ！！！！！」

「そんな事言われても……今のあの子もう誰にも止められません」

□■□■□■□■□■□

「やっぱり失敗作か！！」

「いつになったら完成するんだ！！！」

□■□■□■□■□■□

普通日常（フリーデイ）（後書き）

最後の□■□■についてなんですが、あれは軌跡の記憶の中にあるセリフです。
解釈お願いします。

六話が終わりました。

最近はドタバタしか書いていていないような気がするのでいつかシリアスな話しも出していくつもりです。

では、また七話で～。

記憶蘇生（メモリーアウト）（前書き）

七話目です。
自分なりのシリアスです
こんなのシリアスじゃないと思う方、感想のほうにその怒りをぶつけて下さい。

記憶蘇生（メモリーアウト）

ここは………どこだ?

俺は真っ暗な闇の中、一人で立っていた。

何で俺はこんな所に…?
俺は何でここに居るのか分からなかった。
頑張って思い出そうとしていると、真っ暗な闇の中に一筋の光が見えた。光へと近づいて行く俺。
なんだか………あったかい………

その瞬間、光が急に大きくなり俺の体を包み込んだ。

うわっ………!!!

ーーーーーーーーーーーー
気付くと俺は何やら怪しい研究所の前に立っていた。

「ここはどこだ?」

再び考える。
考えていると研究所へと入って行く親子がいた。　その親子に凄く見覚えがあった。

「………雅樹!?」

そう、その親子は幼なじみで親友の雅樹とその母親だった。
俺は雅樹の所へ走った。

そして、雅樹の肩に手をかけようとしたとき俺の手が雅樹の体をすり抜けた。

「…………えっ？」

もう一回手をかけようとしたがやはり結果は同じだった。

「雅樹！！！雅樹！！！」

次は大声で呼んでみた。だが、反応は無い。

「どうなってんだよ…………てか、あの雅樹…………小さくねぇか？」

雅樹は体が小さかった。いつも見る雅樹より一回り…いや、二回りは小さかった。

顔立ちもまだ幼かった。この事からこの世界の事を考えてみる。

考えた結果、俺はある事に気づいた。

「ここは…………過去の世界なのか？」

だとしたら何故、俺はこんな所にいるんだ？

何で過去の世界なんかにいるんだ？

もう少しここで待ってみる事にした。

その三分後、今度は小さな女の子が研究所の中へ入って行ったその女の子にも何故だか見覚えがあった。

「今のは……美穂……！！」

今入って行った女の子は美穂だ。

何で雅樹と美穂が俺の知らない研究所に入って行ってんだよ………

………もうわけわかんねーよ！！！　色々な事がありすぎて頭の中がもの凄く混乱していた。
だが次に入って行った親子のせいで俺の頭完全におかしくなった。

「………母さんと…………………………俺？」

そう、俺が見たなかで三番目に入って行った人は間違いなく俺と母さんだった。

「なんで？なんで俺がこの研究所に？俺こんな所知らないよ？入った覚えないよ？」

頭がショート寸前だ。
やっぱり俺も美穂や雅樹と同じく幼かった。
と言ってもあれは１１歳ぐらいだろう。

俺は考えるよりも先に足が動いた。
研究所の中に入って確かめようと思った。研究所の中は広かった。
その中の大きなホールにはたくさんの子ども達が集められていた。
みんな１１から１２歳ぐらいであろう。
そして数分後、ホールの中央に白髪のおじいさんが出てきた。

「今日はよくここによく来てくれたね。今日から数年間、君達は研究材料として使わせてもらうよ、無能力者のクズガキ共」

研究材料？何のだ？

ホール全体がざわつく。　当たり前だろう。
いきなりここに来て『研究材料に使わせてもらうよ』なんて言われたら普通、逃げ出すだろう。

「そっ、そんなの嫌だーーー！！！！」

俺が思ったそばで逃げ出す子供がいた。

だが、

「ぎゃゃゃぁぁぁ！！！！」

逃げ出した子供に雷が落ちた。
きっと能力者が落とした雷であろう。

「この研究所に来てしまった以上君達はここから出られない。もしも逃げ出すようなクズガキがいたら今みたいな目に合うから覚悟しときな」

白髪のじじいのくせしてよく言うぜ。

そして子供達はそれぞれじじいに言われた部屋へと向かって行った。
俺の部屋には雅樹と美穂もいた。
俺達はここでも一緒だったようだ。
俺は俺の部屋に入り三人の話を聞こうとした。

「まず、自己紹介からだね。俺は氷宮軌跡」

「俺は鵜夜雅樹」

「私は篠原美穂」

なんで俺達自己紹介してるの？俺達は幼なじみだぞ？改めて自己紹介したのか…………？

そんな事を考えていると俺が喋り出す。

「雅樹と美穂か。宜しく！！」

「宜しく」

「こちらこそ宜しくね」

本当に初対面なのか？
みんながみんな、記憶を消されたのか？
ますますおかしくなる。
トゥートゥートゥー

いきなりサイレンがなり始める。

「仕事の時間だね。じゃあまた後でね」

そう言って俺は部屋から出て行った。
その後に続き、雅樹と美穂も部屋から出て行った
どんな仕事をするのか気になり、俺は俺の後をつけてみる。
どうやら俺の仕事は研究材料の運び屋らしい。
他の子供達もやっていた
ふと、さっきのじじいの言葉を思い出す。

『無能力者のクズガキ共』

無能力者のクズガキ共？どういう意味だ？
俺も雅樹も美穂もちゃんとした能力者だ…………っと、まだ小さいんだもんな。この時能力者のはずがない。
ん………？
でも俺が能力者になったのってこのくらいの年じゃあ…………？

と、その瞬間また光に包まれた。
なんでいきなり………

「ここは……さっきの研究所？」
――――――――――

いきなり場面が変わり、ここはさっきの研究所の実験室的な場所だった。
この実験室には人が余裕で入れるくらいの水槽が３つ程あった。
そしてその３つの水槽の中には人が入っていた。よく顔を見て見る。

驚愕した。

「なんでだよ………！！？？」

その水槽に入っていたのは俺、雅樹、美穂だった
「なんで俺達が入ってるんだよ！！！！！」

ウィーン

実験室の扉が開く音。
さっきのじじいが入ってきた。

「今日は楽しみに楽しみにしていた実験だ」

実験？
俺達に何かするのか？

「これが成功すれば今日から君達は晴れて能力者として新しい人生を歩んでいけるんだよ」

能力者として？
まさか……コイツ……！！
「それじゃあ無能力者能力素朴実験、Ｌｅｔ'ｓ　ｓｔａｒｔ！！！！！」
じじいが手元のレバーを引く。色々な機械音が鳴り、水槽につながっている機械全てが起動する。やっぱりか！！！
こいつ俺達に能力をつけようとしてんのか！！

ん………？
それじゃあ俺達の能力は自分の力じゃないのか？　ここで起きている事が本当なら…………………
キーーーーーーン

突然頭が痛くなり、その場に倒れる。

「夢で……あってくれ」
暗闇の中の光に三度包まれる………………………
ーーーーーーーーーー
「ハッ！！！！！」

次に起きたときは自分の部屋だった。
そしてここが自分の世界であることを確認する。
「夢……だったのか………」

夢でよかった。
でも夢にしてはあまりにも出来過ぎでいる。

側においてあった携帯を取り、開く。
画面右上に刻まれた時刻を見る。

《7月24日　16：43》

どうやら丸一日寝ていたようだ。
今なら昨日の事が思い出せた。
しかし、あの少女はなんだったんだろう…………あれから俺はどうなってこんな所にいるのだろう？

ピンポーン

家のチャイムの鳴る音。
ガチャッ

いいよ、とも言っていないのに入ってくる誰か。
「軌跡！！！」
「あ？勝手に人の家に入って来ないでくれ「雅樹が大変なのっ！！！！」

えっ…………………？

「雅樹が同い年ぐらいのヤツに殺されかけたの…………………」

美穂は今にも泣きそうだ
「今そいつはどこに？」
「もう………いない…」
「くそっ……雅樹はどこに？」

「病院………」

「行くぞ」

俺は服に着替え、美穂と病院へ向かった。病院の病室で雅樹は寝込んでいた。

「雅樹…………」

「………軌跡……か」雅樹の体はズタボロだった。包帯で腹はグルグル巻きになっていた。

「かっこわりぃとこ………見せたな…………」
「かっこわるくなんかないさ………」

俺は優しく雅樹に言う。
「私が……守っていたら……こんな事には……」

雅樹の側に座っている、癒亜は呟く。
その頬には涙がつたっていた。

「軌跡……美穂……気をつけろ………次のターゲットは………お前たちらしい………」

なにが狙いなんだ………
「………あいつは………めちゃくちゃ………強い………」

もう息が途絶え途絶えだ
「あ…つは……幻…を…………つか…………う」
「雅樹！！雅樹っ！！！！！」

「大丈夫。意識を失っただけ」

クソっ…………

絶対に倒してやる…………

記憶蘇生（メモリーアウト）（後書き）

話がようやく動き始めました。
やっとです。

七話は雑な文章ばっかだと思いますがご了承を。
八話は、軌跡が寝ている間に起きた雅樹の出来事について書きたいと思っています。

では、また八話で～。

壮絶幻覚（グロリア）（前書き）

八話目です。

この話しを見ていただいた皆様。

きっと違和感を覚えたでしょうね。ちゃんとなおしましたのでもう一度読んで下さると幸いです。

壮絶幻覚（グロリア）

7月24日

「雅樹君！！今日のデート楽しみですね！！」

こいつ、癒亜が今言った事は本当の事だ。
何故だかデートに行く事なってしまったのだ。
俺は行くなんて一言も言っていないはずなのだが、癒亜は

「雅樹君が気絶した時に言いましたよ～」

っと言っている。
俺はいつ気絶したのか覚えていない。
というか何故今日なんだ？
軌跡のお見舞いにでも行ってやりたいのに………

癒亜が着替えを済ませ、こちらにやって来る。

「雅樹君。今日の私、可愛いですか？」

癒亜のほうを向く………
俺は癒亜の服に驚いた………いや、驚愕したといった方がいいかもしれない。全身が黒いフリフリした何かでしめつくされている。
なんで………なんでゴスロリなんだーーーーーー！！！！！

そう。
その姿は世間で言う、ゴスロリそのものだった。

「どう？可愛い？」

「何でゴスロリなの？」

「好きだからだよ？それより可愛い？」

「はいはい可愛い可愛いですよ。でもその格好でデートはしてあげないからな？」

当たり前だ。
ゴスロリなんかでそこら辺歩かれたら一緒にいる俺まで恥ずかしい思いをする。
そんなのはごめんだ。

「えぇ〜〜〜何でですか〜〜〜？？」

「恥ずかしいに決まってるからだろ」

「じゃあ、良い事してあげますよ」

「なにをしても無駄だからな」
「ここで全裸になって雅樹君に跳び「待て待て待て待てーーーーー！！！それはダメーーー！！！」

それは本当に却下だ。
恥ずかしさをとるより俺は命をとる。
鼻血で大量出血＝死亡、なんていやだ。
当たり前の事だろう。

「じゃあいいの？」

「……今回だけだぞ」

「やったぁ〜〜！！！」

あぁ、もう嫌だ。
そうしてこうして俺達はすぐ近くにあるショッピングモールへといった。
ショッピングモールには様々なお店があった。
主に服屋が多いだろう。　しかし、あいにく俺はファッションというものに興味がない。
着る服なんていつも適当だ。
そんな俺とは正反対に癒亜はファッションにかなりの興味があるらしい。　なんせ服屋を見るなりいきなりその店に入って行き、目を輝かせながら服を物色しているのだから
そして、不思議な事に俺の肩は癒亜が服屋から帰ってくるたびに重くなっていく。
そこでようやく気付く。
あぁ、俺は荷物持ちなのね………

前にもこういう経験をした事がある。
あれは、美穂の買い物に俺と軌跡がつき合わされた時だ。
女ってやつはどいつもこいつも男をコケにしやがる。
男を何だと思ってんだ。
そう、心の中で愚痴を言っているとまた服屋から癒亜が戻って来て荷物を俺の肩にかける。
そしてようやく俺の待ち望んでいた言葉が癒亜の　口から出た。
「今日はこれで終わりです。さあ、雅樹君。帰りましょうか」

やっとだ。
やっと終わった。
安心して肩を落とそうしたがあいにく肩には瘂亜の買ったガラクタ（雅樹思考）がかかっている。　落としたら相当怒られるんだろうな、と考えながら肩を上げる。

「雅樹君今日はご苦労様です」

「………………………」
「雅樹君？」
「今は喋りかけないでほしい。集中が切れて、このガラクタを全部落としかねない」
今言ったのは本当の事。　肩……だけじゃ留まらす頭上にも乗っているのだから。

「そうですか………………って、ガラクタじゃないですから」

「ガラクタだろ。こんなに買って………どうせ一回着たらクローゼットじゃなくて、もうタンスの中だろうが」
「いいんですか雅樹君？『この洋服はここにいる人の趣味なんですーー！！』って叫びますよ？」
「すみませんでした。もうガラクタなんて言いません」
ただでさえゴスロリで浮いてたのに、それは俺の趣味で着させられているなんて叫ばれたら俺は精神的に追い込まれて、一週間……いや、一カ月は　家に引きこもるぞ。

「分かればいいんですよ〜」

どうしても癒亜には勝てそうにない。
色々な面で………。
そうして俺達はショッピングモールを出て、家に帰ろうとした。
その帰り道………

癒亜が急に足を押さえ、その場に座り込んだ。
どうしたんだ？、と聞いてみる俺。

「足が疲れました。ちょうどそこの公園で休憩しません？」癒亜が指差した方向には確かに公園があった。
「俺も疲れたからちょうどいいや」
そして、その公園へ俺達は入って行った。
その公園には中央には噴水があり、そのすぐ側には人が二人座れるほどのベンチがあった。
そのベンチに真っ先に腰をかけ、荷物を全部ベンチの横に置く。
肩と頭にかなりの量のガラクタ………じゃなかった、服などの荷物を持っていたので肩と頭のてっぺんが異常なほどに痛かった。
だから今は癒亜に感謝している。

「疲れましたか？」

「当たり前」

俺はその質問に即答した実際本当に思っているのだから。

「悪いですね……今日は私なんかの買い物に付き合ってもらって」

「ほぼ強制的だったけどな」

癒亜には聞こえない小さな声で呟く。

「はぁ〜。本当はデートしたかったんですがつい洋服を見て飛びついてしまいました」

あぁ、そうさ。

こんなのデートでも何でもねぇ…………………………ただの女王様とその奴隷だろうが………。

「その女王様が…………奴隷に恋をしているんです」

癒亜が何かを呟いたのは分かったが、その呟いた言葉までは聞き取れなかった。

「何かいったか？」

「何でもないです」

さっきからかなり気になっているのだが、ベンチに座った時から癒亜は俺の右手の上に左手を重ねている。

そして何となく寂しい顔をしている気がする。

こんな顔をした、癒亜を初めて見た気がした。

側にあった噴水から水が吹き上がる。

それと同時に癒亜がこちらを見つめる。

俺を見つめる顔はさっきの寂しい顔ではなく、何かを決心したような顔だった。

「もう一度言います」

何をだ？
何をもう一度言うんだ。　俺は検討がつかなかった
「前は少し気がおかしくなったまま言ったんですが………今度は真剣に聞いて下さい」

そう言うと、　癒亜は俺を見つめつつも俺の両手を　癒亜の両手で包み込んだ
「私………雅樹君の事が………好「なにラブラブしちゃってんのかな？」
俺は癒亜から視線を逸らし、声がした方へ視線を移す。
視線の先には６メートルはあると思われる木に高校生ぐらいの男女二人が乗っていた。

「俺の前では困るよ。ねぇ雅樹君、癒亜ちゃん」
いっ、今なんて言った！？なんで俺達の名前を知っている？
男女は木から降りてくる
「だから、消えてもらうよ？」

そう言うと、男の方が俺に向かって右手をかざす
何かをするつもりだ！！！！
そう、察知した俺は素早く男の方に突っ込む。

そして俺は男に殴りかかろうとするが簡単によけられる。
そして、腹に蹴りをいれられ後方に飛ばされる。だが痛みはなかった。
男が手加減をしたからとかそういう次元じゃない　ただ、痛くなかった。

「酷いじゃないか雅樹君～僕が右手出すだけで殴りかかってくるな

んて。同じアパートの住人なのに」
最後の言葉に俺はつっかかった。
同じアパートの住人？
こんなヤツ、俺のアパートにいたか？
髪の色は赤く染まっていて、首の根元手前までのびていて、背は180前半ぐらいだ。
ん………この顔…………同じアパート……………………あっ……
…！！！！

よく男の顔を見て思いだした。

「お前………105号室で最近引っ越してきた………」

「ご名答！！そう、赤井雄大だよ！！！」

やっぱりか………どうりで軌跡の家で見たヤツとそっくりだ。
男が赤井雄大なのは分かった。
でも、何故ここにいて、何故癒亜のことを知っていて、何故癒亜が喋っている途中に乱入してきたんだ？

「お前は何でここにいて何で癒亜のことを知っていて何で癒亜と俺の会話に乱入してきたんだ？」
俺は不思議に思っている事を全部赤井にぶちまけた。
赤井は困った顔をする。
「面倒くさいけど、一つ一つ説明していくよ？まず、僕は妹と散歩している時に君たちを偶然見つけて尾行していたら公園に入って何か面白い話しを聞けないかな、っと思ってここにいました」

こいつ……俺達をつけてやがったのか…………………この野郎…………。

「えっと次は……………翔ちゃんの双子のお姉さんだからかな。顔瓜二つだし」

癒亜が双子だって事も知ってやがんのか…………
「最後のは……………」
赤井が大きく呼吸をし俺に向かって言い放つ。
「君が女の子とイチャイチャしてんのが見ててイライラしたのーーーーー!!!!!」

あぁ、そういう訳ね。
なんて下らないんだろう　俺は右にあるズボンのポケットから小さい鍵を取り出し、手で握る。
赤井と俺の距離、約5メートル弱。
いける…………!!!!
俺はそう確信し、赤井に向かいダッシュする。

一秒目…さっきみたいに殴りかかる。
二秒目…赤井はまたさっきみたいに簡単にかわす　三秒目…赤井さっきと同じく反撃の蹴り。
四秒目…それを体を逸らし上手くかわす。
五秒目…体勢を整え、右手にある鍵を赤井に体に向ける。
六秒目…「ロック」

俺はこの六秒間で赤井の動きを止める事に成功した。

「やってくれるねぇ……正直君がここまでやるとは思ってもいなかったよ」

なんだその言い方は……まだ何かある言い方だ。だが、一度俺の能力でロックしたものは俺が解除するまで絶対に解けない

……はずだった。

赤井は動いていた。

体を動かしていた。

俺の頭の中は真っ白になった。俺の今まで通りの『普通』が目の前で壊されたのだから。

「何？勝ったつもりでいたの？こんなのちょろいんだよ」

ダメだ……頭が回らない………どうしたらいいんだろう？

「雅樹。君は僕の右手を見た時点で負けているんだよ」

右手を見た時点で？

確かに俺は右手を見た。　何も起こらなかった。

「俺の能力は壮絶幻覚（グロリア）。俺の右手を見たヤツに俺が思っている通り

の幻覚をかける事ができる素晴らしい能力だろう？」
……幻……覚……？　そうか……そういう事だったのか………
！！！！！！
俺の中で全てがつながる
「君が最初に俺に蹴られた時に君はなんでダメージがないんだろう、という顔をしたね？」
「全部……全部幻覚だったのか………」
「そう。だからダメージもくらわず、君の能力もかすった………という事だ」
やられた………。
俺は地面に膝をついた。　幻覚か………俺の能力じゃあどうにもならねぇな………。
「あきらめたか…………じゃあ仕方ない。トドメだ」
翔ちゃん、赤井がそう言うと、木の裏から細く、鋭い剣を持つ手が出てきて赤井に手渡された。
その光景を見て俺は立ち上がった。
「やる気になったのかな？」
「うるせぇ」
「ん？」
「うるせぇっつてんだよ！！！！！」

俺は意味もなく突っ込んだ。
無謀だとは自分でも分かっている。
でも何もしないでやられるよりはやってやられた方がいいかな……
と考えただけだ。

「さよなら……雅樹君」
俺の腹から血が綺麗に飛び散る。
鮮やかな赤い色をしていた。
そして最後にこう思ったた

これも……幻覚だったらなぁ……………………

俺は赤井に腹を剣で切られ、地面に勢いよくぶっ倒れた。
「無謀と勇気は違うんだよ？……次は美穂と軌跡どっちにしよっかな～」
そう言い残し、赤井とその妹は公園を去っていった。

「雅樹君！！？？」

癒亜が雅樹の側に駆け寄る。
どうやら癒亜も赤井の右手をみたらしく幻覚にかかっていたようだ。

「雅樹君………私がもっとしっかりしていれば………こんな事には……」
癒亜は雅樹を抱き寄せる　赤き血がゴスロリの黒を赤く染める。
癒亜は泣いた。

大声で子供のように泣いた。
泣きじゃくった。

その大声は公園のすぐ近くにいた美穂の耳にも届いた。
美穂は何だろう?、と首をかしげ公園に入る。
その光景に美穂は驚愕した。
それをみるなり真っ先に携帯を取り出し、救急車を呼んだ。
通話を終えると美穂も雅樹の側による。
そしてこの事を軌跡に知らせなくては、そう思い美穂は走った。
自分達の住んでいるアパートに必死で。

ベンチの横に置いてあった癒亜の荷物は全て横に倒れていた。

壮絶幻覚（グロリア）（後書き）

最初にこれを見た方、
本当に申し訳ありませんでした。
以後、気をつけます。

では、また九話で～。

狂乱凶歌（クレイジー）（前書き）

九話目です。
なんだかこれ投稿するのに随分時間がかかったようなきがしました。

狂乱凶歌（クレイジー）

７月２５日

空は雲一つない真っ青な色をしていた。
そんな空とは別に、氷宮軌跡の心は暗い暗雲がたちこもっていた。

誰が…誰が雅樹を………
軌跡はそれが気になって仕方がなかった。
なんせ、軌跡は昨日、昔からの大切な友人を殺されかけたのだから。
その友人、雅樹は今病院に入院している。
腹を刃物？で深く斬りつけられれたらしく、完治は数ヶ月後らしい。
だが軌跡は雅樹の傷の事をあまり考えてはいなかった。
ただ、雅樹を殺しかけたヤツの事を深く考えていた。
つまり今の軌跡には『犯人を突き止めて殺す』という事しか頭にない。
一人自分の部屋で仰向けになり寝転がる軌跡。
その目は『憎悪』という一言がピッタリな目をしていた。

殺してやる………絶対に…………。

何かを感じとったかのようにいきなり立ち上がるそして勢いよく玄関を開け、家から出て行く軌跡
軌跡は雅樹がやられた公園へと向かっていた。
そこに犯人がいるわけではない。
ただ、少しの可能性がある限りこの男、氷宮軌跡は動く。
ましては大切な友人のためだ。
動かないよりも動いたほうがいいのだと考えたのであろう。

ポケットに両手をつっこみながら速歩きをして公園へ向かう軌跡。
すれ違う一般人に当たってても謝りもせずにスタスタと行ってしまう。
そして、遂に例の雅樹がやられた公園に到着した
辺りを見回して見るが、　普通の一般人しか見えない。
噴水の周りを一周しつつも周りをさらに見渡す。　噴水は公園の中央にあり公園全体を見渡すのにいい場所となっている。
そして、ある不気味な男を一人見つける。
軌跡はその男を睨みつける。
男は軌跡を睨み返す。
そして、不意に不気味な笑みを見せる。
軌跡は近づこうとしたが男の方から近づいている事に気づき、やめる。
そして男はある程度軌跡に近づくと犯人確定の一言を発する。

「雅樹くんの仇かな？そうだよね、俺がやったんだもん。仇撃ちは当然だよね」

朝からひきつっていた軌跡の顔が少し緩む。
冷静に静かに、軌跡はこう言った。

「殺す」

言った直後に軌跡は走り出し、男の方へ向かった　距離１０メートルはあっただろうに軌跡はわずか一秒で男の手前に近づく。　そして顎にアッパーをくらわそうとした。
だが男は顎に拳が当たる寸前にジャンプをしかわす。

それを見逃さない軌跡。　男がジャンプをした瞬間に軌跡もジャンプする。　跳躍距離３メートル程度はあっただろう。
男は後からジャンプしてくる軌跡の顔面を蹴りつける。
地面に叩きつけられる。　そして男は地面に倒れている軌跡めがけて上から思いっきり踏もうとする　だが、間一髪それを横に体をずらしよける軌跡。男が踏み込んだアスファルトの地面には亀裂がはいっていた。
よけた直後に軌跡は立ち上がり、右手で男の顔面　を殴ろうとする。

バシッ

殴りかかろうとする右手　を男は片手で受け止める
「なんだよなんだよ。こんなもんなの？」

「うるさい………！！！！」
軌跡は足を振り上げ、男の手をはじく。
そして後ろへ下がり体勢　を整える。
男はいきなり何かを語り始める。

「自己紹介がまだだったね。俺は赤井雄大。君達のアパートの１０５号室に住んでるんだ」

赤井……雄大…………そうか……この前………引っ越して来た奴か…………………………
軌跡は色々な事を考えた　何故雅樹を殺そうとしたのか。
だがそんな事はもう軌跡にとってどうでもよかった。
犯人が分かっただけで十分だったのだ。

「……あはははははっっっっっ！！！！！！！！！」

軌跡はいきなり狂ったように笑った。
その笑いはとてつもなく不気味だ。

「おぉっと、遂に狂っちまったか？」

「狂った？ははっ、そうかもなぁ……でも俺でも分かんねぇんだよ……なんだか楽しくなっちまった………ひひっ」

その顔は普段の軌跡とは　まるで違う。
一言で言うなら『邪悪』と言った方がいいだろう　本当にそんな感じだ。

「あ〜あ。遊ぶ前から狂っちゃあつまらないよ………」

そう言って赤井はその場から立ち去ろうとし、軌跡に背を向けた。
だが、一歩遅かった。
赤井の体が動かない。
足が前へ踏み出せない。
「君の能力だね………軌跡」

軌跡に背を向けながら喋りかける赤井。

「死の領域（デスゾーン）」

死の領域……縦と横の長さと場所を指定し、指定した場所に縦と横の長さでできた四角形を作り出し、その四角形の中にいる人物の指定した部分だけ封じる…………………という軌跡が編み出した技だ。
今赤井はそれにより動きを封じられている状況だ　軌跡はわざとなのか口の動きは封じなかったようだ。

「君の能力って本当におかしいよね。ずるいよね」
そう言った瞬間、絶対に動かないはずの赤井の体が動き、軌跡のほうを向いた。
「でも俺には劣るけどね」
軌跡はありえない光景に一瞬驚いた。
だが、軌跡はまた狂ったようにこう赤井に言う。「そうじゃなきゃあ、面白くねぇ………」
「君はもう、俺の幻覚の虜だよ」
そう、最初から全て幻覚だったのだ。
軌跡が最初に赤井を見たときから全て………。
「さぁて、お遊びはここまでだよ？君もお友達と同じように腹を切り裂いてあげるからね……」
赤井も笑っていた。
不気味に……今の軌跡ほどではないが不気味に。そしていつの間にか、赤井の右手には雅樹の腹を切り裂いたあの剣が握られていた。
「やってみろよ！！！！！」
「じゃあお望み通り」
赤井が軌跡に切りかかろうとする。
だが軌跡は避けようとしなかった。
「終わりだ」

刃が軌跡の腹を切り裂く　切り裂いた腹から大量に血が飛び出す。
だが、軌跡は雅樹のようには倒れなかった。

「まだ笑うのか…………………君は」

赤井が今言ったように軌跡は笑っていた。
腹を深く切られて血が大量に出ていても、笑っていた。
笑っていたのだ。

「あはハハはははハはははハハハはっっっッっッっ！！！！！！！！！！」

「君ってやつは」

赤井は体を斜めに切り裂いた。
腹を切ったときと同じように血が飛び散った。
尋常な量じゃなかった。　もう終わった、そう赤井が安心したそばで軌跡は
「ハハははハハッっ！！！！！！！！」

笑った。

「化け物が…………」
赤井はかなり焦っていた　2度切り裂いても倒れない化け物が目の前にいるから………
赤井は一旦ひこうした。　化け物と戦っているのがだんだん怖くなってきたのだ。
そして幻覚を上手く使い　軌跡にはもう一人の自分を見せておき、赤井自身は公園から立ち去った。　赤井が立ち去った直後、軌跡は遂に倒れた。

だが軌跡にはかろうじて意識はあった。

最後の力を振り絞って軌跡は自分の能力である絶対領域を使い軌跡が受けたダメージを0にした。つまり、切り裂かれたという事情を変えたのだ。　絶対領域により完全回復　した軌跡は立ち上がる。

「反撃開始」

軌跡は立ち去った赤井をあてもなく追った。

狂乱凶歌（クレイジー）（後書き）

みなさん、遂に軌跡が壊れましたね。
怖いですね。
十話はまぁ、また軌跡と赤井が戦うと思います。

では、また十話で～～～

反撃開始（デスカウンター）（前書き）

やっと十話目です。
最近テスト近いし、部活も新人戦だし疲れます。

反撃開始（デスカウンター）

俺は公園から逃げた赤井を追っていた。

「にしてもさっきの俺……どうしてたんだろう？」

さっきまでの俺はハッキリ言って狂っていた。
まず、あんなに大量出血したのに意識も失わずに立っていられたのが不思議だ。
かろうじて意識があったから能力使って生き延びたけど……
一人考えながら歩く軌跡　今は大量出血して頭が冷えたのかかなり冷静だ。　そして軌跡は一つの難関にぶち当たる。

俺…どうやって赤井を探そう……？

それは最も先に考えなくてはならない事だった。　あ～あ。これだから俺ってヤツは……。
軌跡はその場に頭を抱え込みながらしゃがむ。
こんなんだから俺は雅樹や美穂にいっつもバカにされるんだよなぁ～。
はぁ～～～……。
だがそんな軌跡に一筋の光が見えた。
待てよ…俺の能力をフルに使えば探せるんじゃないのか？
軌跡は立ち上がり、自分で考えた案にのっとりやってみることにした。
絶対領域は【事情】の他に【領域】も操れる。
軌跡は目をつぶり、ここ第七学区の全体の地図を頭に思い浮かべる。

赤井の居場所、と考える　すると頭の中の地図に赤い点がポツンと現れた。
そこか……赤井……。
赤井の居場所、そこは数日前に翔子と戦った廃工場だった。
軌跡はゆっくりと目を開ける。

「……ハァ……ハァハァ」

軌跡は肩を落とし、息を切らせる。
それもそのはずだ。
第七学区全体を頭の中に出し、さらにそこから特定の人物を探し出すなど不可能に近い事だ。
できたとしてもかなりの体力を消耗する。
まさかこんなに体力を消耗するとは思ってもなかった………。
だけど場所は分かった、　あとは乗り込むだけだ。　そう心の中で呟き、軌跡は息を切らせながらも廃工場へと走って行った。

～これより少し前～

公園から出た（逃げ出した？）赤井はある廃工場へと向かっていた。

「冗談じゃない…、なんであんな化け物と…」

呟きながら少し小走りする赤井。
赤井はわかっていたのだ　軌跡という化け物を目の前に怖がっている自分がいる事を。

だが、赤井は認めたくなかった。
それを認めたら、『負け』を認めたも同然だったからだ。
そして赤井はとある廃工場に着く。
中に入っていく赤井。
その廃工場の中には三人の人影あった。

「お兄ちゃん、お帰り！！！」

中に入った瞬間に赤井に抱きつく一人の女の子。

「あぁ、ただいま」

赤井は抱きついてきた女の子を抱き返す。

「………気持ち悪い」

「兄妹どうしでそんな事やるのはどうかと思う」
奥から男と女の声。
そして男と女は赤井に近づいてくる。

「これは俺達兄妹の挨拶なんだよ。バカにするなよ」

赤井は少し怒りまじりにそう言い放つ。

「……分かった。それであの男はどうなったのだ？」

男の方が赤井の目の前に立ち、手を腰に当てながら聞く。

「…あれは化け物だ…」

そう一言だけ言うと、奥に置いてあるソファに腰をおろす。

「負けたの？」

女は赤井のよどんだ顔を見て、嫌みらしく聞く。

「…………………」

だが、赤井は口を固く閉ざしそっぽを向いている　質問に答えるつもりはないようだ。

「……負けたんだな」

男の言葉に対しこう赤井は言う。

「負けたんじゃないよ。何回切っても倒れないから飽きて帰ってきただけよ、みどりっち」

「………それは本当なのか？あと、そのあだ名で呼ぶのやめろ」

「えぇ～研究所にいた時からこれで呼んでたから今更『緑』なんて呼べないよ～」

「………いいからやめろ。そして答えろ」

男……緑の言葉が怒りじみてきた所で赤井は、ごめんごめん、と言い謝る

「本当だよ、だから化け物なんだよ…あいつは」

「私が作った剣の中で最高傑作なのよ？」

「でも、倒れなかったんだよ……翔ちゃん」

ありえない、といった顔で赤井を見る女。

女…翔子は驚き、とっさに呟く。

「嘘だ」

翔子は認めたくなかったのだろう。
自分の最高傑作が活躍しなかった事を。

「嘘じゃない」

その言葉を聞いた途端に翔子は赤井に背を向け、何かをブツブツと呟き始めた。

「美遊。準備できた？」

ソファから立ち上がり、この廃工場入り口付近にいる妹…美遊に問いかける赤井。

「私は大丈夫だよ？お兄ちゃんは準備できた？」

美遊が聞き返す。

「万全さっ！！じゃあ行くか！！」

と、赤井が妹のもとへ向かおうとしたとき、

バーーーーン

と入り口にある、閉まっているはずの扉が勢いよく蹴り飛ばされた。

「みぃ〜つけたぁ〜！！！」

～～～～～～～～～

やっと着いた。

道中色々大変だったが、　やっとここへ着いた。

そこには赤井の他にあと三人の人影が見える。　赤井だけ居ると思っていた軌跡は驚いた。

俺の近くにいる赤井と女の子はハッキリと見えるが、　少し奥にいる二人の姿は暗くてよく見えなかった。

「あんたら何かのグループなのか？」

不思議なため聞いてみる　なんせ赤井に仲間がいるなんて聞いてもいなかったからだ。

「まぁ、そんな感じかな。というか何で生きてるの？何でここが分かったの？」

かなり戸惑っている赤井に自信満々にこう言い放つ。

「全部俺の能力さ」

その一言で全てのつじつまがあってしまうのが赤井は怖かった。

「つくづく恵まれているんだね…君は」

そう赤井は軌跡に言うと、「翔ちゃん、みどりっち、ここは頼んだよ」と言い残し妹らしき女の子と一緒に裏の出入り口へと走って行った。

「待てっ！！！逃げんのかよっ！！！」

あとを追おうとする軌跡だが、奥にいた二つの人影が俺の目の前に立ちふさがった。
その人影は男と女だった　男は誰だか分からなかったが、女の方はとっても見覚えのある人物だった

「何でお前がここにいるんだよ……翔子！！！」

そこにいたのは紛れもない、数日前にここで一戦交えた女、翔子だった。

「私は赤井の仲間なの、そこんとこ宜しく」

まさか、そんな……翔子が赤井の仲間？
それは信じがたい真実だった。

「騙してたのか？赤井に俺の情報を提供するために俺とちょこちょこ接触したのか？」

軌跡は右手を握りしめる

「騙してたんじゃないよ？私がいつあなた達の仲間だよ、なんて言った？」

怒りで体が震えてくる。　まさか、こんな形で裏切られるなんて。
たったちょっとの間だったが俺は翔子を仲間だと　思ってた。
なのに…………！！！！！

「許さんッッッ！！！！！」

遂に怒りが抑えられなくなった軌跡は翔子に殴りかかろうとする。
だが、翔子の前に男が立ちふさがり左手で受け止めようとした。
そのまま殴ろうとしたが男の左手に触れる寸前に何か嫌な予感がした。
俺は自分の本能に従い、　寸前で右手を止めた。
そして後方へと距離を置く。

「………何で止めた？」

不思議そうに聞く男。

「俺の本能だ」

ふふっ、と苦笑する男。　その顔は少し不気味だった。

「………軌跡…君ってヤツは昔から変わらないな」

「どういう意味だよ！！！」

「………本能とか言って何でも片付け用とする所……昔から変わらん」

「お前さっきから昔、昔って言ってるけど俺お前の事初めて知ったんだからな？」

俺はこいつの事は分からない。
なのにこいつは何かと俺の過去を知っているかのように話す。
俺の頭の中でも見れるのかこいつは？
忘れているだけなんじゃないかと思い、思い出そうとする努力はするがやっぱり分からない。

「………すまない、そう言えばお前は記憶がなかったんだよな」

記憶が………なかった？

「どういう……意味だ？」

ノーコメントだ、と言うと男は気楽に自分の自己紹介を始める。

「………僕の名前は緑誠夜。思い出したか？」

緑誠夜……誰だ？

「………その様子だとやっぱり記憶が無いんだな。残念だ」

この口調が妙にムカつく

「………軌跡、お前は本能で右手を止めたんだよな？」

「そうだけど？」

「………その軌跡の本能とやら、やはり凄い」

「誉めてんのか？」

「……蓄めているんだ。本能がなかったら今頃お前の右手丸ごと無くなってたぞ」

右手が丸ごと無くなっていた？
どういう意味だ？
あいつに触れたら触れた部分が無くなるとかそっち系の能力者なのか？

「……僕の能力は左手に触れたものを空気にする事ができる。空気にしたものをもう一度再生する事もできるし、その物質で出来る物なら大体は最初とは違うものにも出来る」

そう言った後、誰にも聞こえないような小さな声で、「美穂っていう子には適当な事言ったけど」と呟く。

「つまりお前の左手が俺の右手に触れてたら今頃俺の右手は空気と同化して二度とかえらぬ物になってたわけか」

「……そういう事。それが僕の能力、虚無反転」

なんて恐ろしい能力なんだ。
緑ってヤツには近づかない方が良さそうだな。
そう思った瞬間、俺の背後からもの凄い殺意を感じた。

軌跡が後ろを振り向くとそこには大剣を持った鬼が今にも軌跡を真っ二つにしようとしていた。

そして振りかざされる。　間一髪避ける。

だが、避けた先には緑の左手がありとっさに近くにあった石を投げつける　石が緑の左手に触れると音もなく消えていった。

「マジかよ」

本当だったのねと感心する軌跡だがもう今にも体に触れようとする緑の左手。

逃げる体勢に入り、緑に背を向けダッシュしようとした時には時すでに遅し。

翔子が大剣を横に振っている途中だった。

前には大剣、後ろは左手　とっさに能力を使おうとするが体力の消耗が原因でうまく使えない。

……………終わった…………。

軌跡は諦め目をつぶる。　体が真っ二つにされるのが先か、体が空気となるのなが先か、どっちだろうなぁ～とか考える。

その瞬間、頭に何かの映像が見える。

そこにいるのは俺に左手を向けて襲いかかってくる緑色の髪の毛をした青年。

だが、その映像の中にいる緑はまだ幼かった。

研究所らしき所に一人でポツンと体育座りしている。

そこに駆け寄る一人の男の子。

映像の場面が変わり、少し大人になった緑が自分らしき人物と喋っている　話し声が少し聞こえる。

「………いつまでも……僕と友達でいてくれ」

「当たり前だろっ！！　みどりっち！！」

みどりっち…………　その言葉を聞いた瞬間に　頭の中にある緑誠夜という人物の記憶が溢れかえる。
そして、思い出す。
緑誠夜という友達を。

軌跡が目を開けた瞬間に　軌跡の周りにとてつもない爆発が起こる。
とんでもない量だ。

「………なっ、なんだっ！！！！！？？？？」

「………きゃあっっ！！！！！？？？？」

爆発に飲み込まれる翔子と緑。

空間爆発（アブソリュートフォース）。
事情を拒絶する力に不可解な振動を加えて分子を振動させたホコリ

や物体を起爆剤とした空間を爆発させる。
今の爆発はこれによるものだ。

爆発がおさまると軌跡は何かモヤモヤしていたものがスッキリと解決したような清々しい顔で緑の　事を見つめていた。

「思い出したよ…………みどりっち……お前の事全部」

「………それは良かった。でも、この爆発は酷いよ」

爆発に巻き込まれて翔子は気絶しているのに対して意識がある緑。

「ごめん、なんだかみどりっちの事思い出したら力が溢れ出してきて、思いっきりぶっ放しちゃった」

「………そうか………」

緑は意識がもうろうとしていた。

「………赤井を止めないと、大変な事になるぞ」

必死に訴える緑。

「赤井は何をしようとしてるの？」

「………あいつはこの学園都市にいる人間全員を幻覚にかけ学園都市を支配しようとしている」

それを聞いた奇跡は戸惑った。
あいつがそんな大規模な事をしようとしているなんて思ってもいなかった

「………速く行け……！！もう少しで始まるぞ」

ありがとう、と言い残し俺は走った。
赤井を止めるために。
この学園都市を救うために………。

反撃開始（デスカウンター）（後書き）

もうクライマックスに近づいてまいりました。
もう少し、いや多分次で一章は終わりですね。

とにかく眠いです。
ではまた十一話で〜！！！

幻覚終焉（ジ・エンドグロリア）（前書き）

十一話目ですね。
自分の中では一章完結です。
はぁ～疲れました。

幻覚終焉（ジ・エンドグロリア）

軌跡は走った。
一刻も速く赤井を止めなくてはいけなかったら…　だから走る。
だが軌跡にはあてがない　またさっきみたいに絶対領域を使って赤井の居場所でも探そうとすれば、軌跡の体が演算と体の疲労により壊れるであろう
だから軌跡は自力で赤井を探した。

あてもなく、ひたすらいそうな場所へ行ってみる　学園都市を走り回った。

だが、見つからない。

学園都市と言ったらかなり範囲が広い。
ほんの数十分程度じゃ絶対に回りきれない。
それでも軌跡は走り回った。
何がそこまで軌跡を動かしているかは分からなかった。

「………ハァハァ………アイツ………どこだ……」

息を切らしながら呟く。　今日一日で能力を使い過ぎたツケがまわってきたのだろう。
軌跡は今にも倒れそうな程に体がボロボロだった　足はガタガタと震えている。
何度も言うが、そんな体でこの男、氷宮軌跡は走りつづけているの

だ。

そして、急にその場に立ち止まる。
何かを感じ取ったかのように。
軌跡の見つめる視線の先は学園都市の中でもトップ10の高さには入っていると思われるとても高い　高層ビル。
軌跡はそのビルの屋上をじっと見つめていた。

「…………あそこか……」

そう小さく呟くとまた走り出す軌跡。
だが今度はあて無しの『無駄』に近いものではない。
目的地を見つけそこへ走って行こうとする、無駄ではない走りだ。
軌跡はきっと気づいたのだろう。

そのビルの屋上に人影らしきモノがある事に…………

確かにそこには人影らしきモノはあった。
だがあまりにも距離が離れているためその人影がただの『モノ』だという可能性もある。
人影よりもモノという可能性のほうがとても高い　でも、今の軌跡には少しでも可能性が見えたらその可能性にかけてみる、　という考えしかなかった　普段の軌跡もこんな考えだが、それはちゃんと頭の中で考えて編み出したのがその考えだったという事。
しかし今の軌跡にはそんな事を考える暇などなかったのだ。
ビルを見つけた場所とビルの距離、約5キロメートル弱。
普通なら『行こう！』なんて考えは出て来ない距離だ。
それ程までに距離があったのだ。

だが軌跡はビルに向かって全力疾走をした。
軌跡は自分の体が軽くなったかと錯覚した。
なにせ走って走っても疲れてこないのだ。かなり好都合な展開にちょっぴり喜ぶ軌跡。
全力疾走を数分間続けていると軌跡はいつのまにかあのビルの目の前に立っていた。

善は急げ！！

の言葉のごとくビルへ入り、屋上を目指す。
エレベーターなんて遅くてつかえない。
だからエスカレーターを軌跡は全力でダッシュする。
これは神様が俺にスターを与えて下さり、無敵にしてくれたとしか考えようが…………

とか、少しくだらない事を考えながら屋上へとダッシュ！！！

そして７７階…屋上――

そこには忌まわしき赤井が立っていた。

「一歩遅かったね。もう準備完了しちゃったよ？」

赤井は軌跡を見て、いやみらしくそう言うと軌跡に背を向け手すりによりかかり学園都市全体を見渡した。

「なぁ、軌跡…君はこの学園都市がどんな風に見える？」

と、何を考えているか分からない赤井の質問に

「さあな、お前は？」

「俺は…腐って見える」

どこか不機嫌そうに言い放つ赤井。
だがその一言にはかなりの重みを感じる。

「俺や軌跡やみどりっちや雅樹や美穂ちゃんなどの多くの子供が研究の材料にされた。そんな学園都市を俺は許さない。だから俺はこの学園都市を支配して俺の理想の新学園都市を作り上げる」

赤井はおふざけ無しの真剣な顔で語る。

「それがお前の考えか、赤井」

その通りだ、と答える赤井は軌跡の方を見る。

「お前は…それで全て救われると思ってんのか？全て終わると思っ

てんのか？」

「君はこの学園都市が憎くないのかい？俺達をこんなにも恐ろしい化け物にした学園都市を！！！」

「俺達を化け物にした学園都市？」

「そうだよ…思い出せよ、俺と軌跡達が受けた実験をよ！！！」

あの夢の事か……？
あの夢は俺の過去だったのか………？
今赤井が言っている事とあの夢が本当なら全てつながる。
今はその事を軌跡は信じる事にした。

「俺は…その実験の事をよくは覚えてはいない。だから何ともいえない。だが、俺は一つだけ言える事があるとすれば…」

軌跡は息を大きく吸い、赤井に向かいこう言い放つ。

「憎しみからは何も生まれない」

赤井は驚愕した。
その一言に酷く驚いた。　軌跡なら分かってもらえると思っていた。
あの実験を一緒に受けた軌跡なら分かってもらえると信じていた。

なのに軌跡は赤井が考えている事とは真逆の事を言った。
そして赤井は現実から逃げるかのように軌跡にまた背を向けた。

「君なら、分かって貰えると思ったのに……………………残念だよ」

美遊、と赤井が呼ぶとどこからかまだ幼き女の子が出てきた。

「始めるぞ」

赤井に美遊と呼ばれている女の子はその言葉に反応し、赤井の背中に両手をあてる。
何かを悟った軌跡は赤井へ向かい走る。
だが赤井から少し離れた場所で軌跡の体は弾かれてしまった。

「何だ…これっっ……！！」

「もう遅いよ。俺の周りに張っているバリアは能力者を拒絶する力があるから近づけないよ」

くそっっ…
と後悔する軌跡。
そして何かが始まった。　赤井は両手を学園都市へ向けた。
そしてその両手から何か得体のしれないオーラのようなものが出始めた。　そのオーラは学園都市をゆっくりと包み込んでいく。

「やめろっっっ！！！！！！！赤井っ！！！！！！！」

叫んだが軌跡の声はもう届いていないようだ。
何とかしようとした。
だが、出来なかった。
軌跡の体は疲れきっていてとても能力が使える状態ではない。

「くそっ…………」

何も出来ない自分がみじめだった。

「赤井ぃィぃィっっっっっ！！！！！！！！！！！！！」

叫ぶ事しか出来なかった　ふと、不思議な感覚に襲われる。

この感じ……さっきと同じ………

そう、軌跡はいつの間にかみどりっちと同じ形で映し出された映像を見ていた。
そこにはまだ幼き男の子が身元の分からない研究者達に何処かへ連れて行かれる姿。
数年後…らしき展開。

またもや俺らしき人物が出て来る。
多分、歳は１２くらいであろう。
そして、二人はよく話し合った。
恋愛の事やら研究所の事その他いろいろと……
微かに喋り声が聞こえてくる………

「約束だ。絶対にこの研究所に復讐を果たす」

「うん。約束ね」

――――――――――――

軌跡は赤井雄大について全て思い出す。
緑の時と同じように力が湧き起こってくる。
だが、緑の時とはまた違った力だった。
なぜだか暖かさを感じられる。
これしかない、そう軌跡は思いその湧き起こる力をバリアに向けて解き放った。
そのバリアは凍結し砕け散った………

「なっっっ………に？」

赤井は驚き、一時幻覚をかけるのを中断する。

空間凍結(アブソリュートゼロ)空間を止める力を使い分子や空気を始めとする空間事態を凍らせることが出来る。

これが今のそれだ。

「何でだっ……このバリアは壊れないはず…何やった？」

「俺もよくは分からん」

正直な所実際そうだ。
俺は今の能力について全くもって分からない。
ただ、赤井とみどりっちの事を思い出したときに力が溢れてきた、それしか分からない。

「まずは君からだね……軌跡」

赤井は右手を軌跡にかざす。
幻覚をかけるしぐさだ。　だが軌跡はその事を知っていたのに止めようとしなかった。
だが、右手をかざして赤井は気付いた。
今、ここらの周辺が異常な起きていることに。
赤井は右手を軌跡にかざしても、それから頭の中で演算を始めても、軌跡には何も起こっていないのだ…………………

「どういう事……？まさか…また君が？」

軌跡はふっ、と笑うと赤井の方を向いて

「俺も今気付いたさ。多分これは無意識だ」

そう、ビルの屋上は特殊な領域と化されていた。

零の領域（ゼロゾーン）　ある一定の領域内にいる使用者以外の能力者の能力を封じる。

これによりビルの屋上は　能力を全く使えない領域（ゾーン）と化したという事だ。

「能力が使えないんじゃあ何も出来ない……」

あきらめの一言。
赤井は膝からゆっくりと地面についた。

「終わりだ、赤井」

軌跡は空間爆発を使った

ドガァァァァァァァン

とてつもない音と共に屋上が爆発した………。

――――――――――

目を覚ますとそこは病室だった。
視界の中にうつったのは親友二人の姿。

「軌跡っ！！！」

勢いよく美穂が俺の体に抱きついてくる。

バキッ、ボキッ

背中から嫌な音がした、でも痛くなかった。
今は麻酔にかけられた体に感謝しよう。

「無事で良かった」

そして雅樹の声。
何だか久し振りに聞いたような気がした。
そして美穂が俺から体を離す。

「もうっ！！！三日間ずっと寝っぱなしだから心配したんだよ！！！」

美穂の目が少しうるおっているのが分かった。

「三日間も寝てたのか～　そう言えば、赤井は？」
そう言えば赤井の姿が見えない。
同じように爆発でぶっ飛んだんだから同じ病院に運ばれたっておかしく無いはず………

「行方不明」

俺は雅樹の言葉に耳を疑った。
行方不明って……どういう事だよ………。
「軌跡……お前は赤井に運ばれてここにいるんだ」

は？
さらに耳を疑う。
遂に壊れたかと思った程に…

「赤井はお前よりボロボロの体で妹とお前を担いでこの病院にやって来たんだ」

なぜそんな事を……

「そしてお前を病院に置いてきた後にどっか行っちまった。アパートも空き部屋になってたよ」

そっか…
あいつはいったい何をしたかったんだろう…
考えても答えは出て来ないか。

「みどりっち、赤井……何かとありがとな……」

病室にある窓に向かってそう呟く。

「誰だよみどりっちって？」

そう言えば雅樹と美穂はみどりっちの事分かんないんだよね………

「秘密……」

「何だよ教えろよ！！」

「やだね！べ〜〜」

「なんだとっ……ぐっ…」

「あんまり暴れると傷口開くよ」

「もう……開い……た」

「だっせ！！倒れてやんの！！！」

その日の病室は笑いに満ち溢れた……
一時の戦いを終えた少年達は笑顔でいた。
このまま楽しい時間が一生続けばいいのに、と感じる程に。
だが、少年達にはそんな時間なんて許されなかった…………

●○●○●○●○●○●

学園都市内にどこかに健在する研究所…………

「００１の記憶が蘇った結果、新たなる能力を手に入れました」

その研究所では研究員と思われる大人が二人、テーブルに腰をかけていた

「やはり００４と００５との接触は００１に新たな能力を与えたか……」

そう言った一人の研究員がテーブルにあるコーヒーを口に含んだ。

「クローン量産の件はどうなりますか？」

「クローンの件か………あれは後回しだ」

「分かりました。ですが００５が今後どう動くかで我々の動きも変わってきます」

「それもそうだな………まあ、いい。今日は００１が新たなる能力を手に入れた事だけでも喜ぼうではないか」

「そうですね」

そして大人二人は手元にあったコーヒーを飲み干す。

「あいつらにやられた傷がウズく………」

そう言った男の顔には大きなバツが刻まれていた

△▲△▲△▲△▲△▲△

どこかの誰かさん達が血まみれとなった公園……　その夜遅く……

「ねーねー、この血痕誰のかなぁ？」

「それを今僕達が調べているんだろうが」

その公園には男女が二人そこらへんじゃ見ない姿をして何かを調べていた

「閾矢(いきや)の力使えばこんなの楽勝じゃん」

「疲れるから嫌なの、というか普通に調べれば簡単じゃあないか」

「え〜、そっちの方が面倒くさ〜い」

「はぁ〜、君は本当に警備員（アンチスキル）なのか、茜？」

「ふーんだ！！どうせウチには警備員なんて仕事できませんよーだ！！！」

その女は公園からスタスタと出て行く。

「ごめんごめんっ！！！僕が言い過ぎたからさ、頑張ろうよ、ね？」

それを引き止め、謝る男

「仕方ないなぁ〜、ウチ頑張っちゃうからっ！！」

△▲△▲△▲△▲△▲△

幻覚終焉（ジ・エンドグロリア）（後書き）

一章完結！！

何か色々説明忘れたんで一応言っときます。

赤井の妹、美遊は一応能力者です。能力補助（スキルサポート）っていう能力使います。
さすがに赤井一人じゃ学園都市全部は幻覚にかけられないんで妹はその幻覚の補助能力です。
様々な能力の力を増幅させる力、と考えて下さい
とりあえず一章完結です　お疲れ様でした。

感想聞けたら嬉しいです　宜しくです。

ではまた〜〜〜

★キャラ設定&裏話☆（前書き）

今回はキャラ設定と裏話、今までの振り返りについて書かせてもらいました。

どうか宜しくです。

★キャラ設定&裏話☆

皆様のおかげで無事に一章完結しましたー！！
なので今回はキャラ設定と今までの話を振り返ってみたいと思います。
まずは振り返りです！！

▽▼▽▼▽▼▽▼▽
一話は特にはありませんね。もう一度言いますが分かる人には分かる最初でしたね。

「おいっ！！俺大変だったんぞっ！！それで終わら……」

何だかうるさいですので黙っててもらいます。
このように途中でキャラが乱入するかもしれませんのでご了承を。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽
二話目は初めて雅樹と美穂が登場しましたね。
ここで二人の能力が分かりましたね、はい。
あと、赤井もこの話で初めて登場しましたね。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽

三話は翔子の登場です。　武器変換はかなり脅威だったですね～、軌跡もさすがにつらかったですよね～

「あぁ、つらかった。なんせいきなり女の子に…」

呼んでないからね？
ちょっと黙っててね？

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

四話は癒亜の登場です。　雅樹のキャラが崩れましたね。本当はもっと冷静でクールな感じを想像してたのに……
癒亜は一途ですね～。
これからも雅樹と美穂のラブラブライフは続きますのでお楽しみに！！

「こっちの事を少し考えろ、あ？」

雅樹君がキレ気味なので　次へ

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

五話目、みどりっちの登場です。自分の中で結構好きですみどりっち。

だけど、死にかけましたね！可哀相に……

「……マジで昇天したかと思った……あれはヤバい……」

というように、みどりっちは股関に机を粉砕する程の蹴りをくらいました　……
可哀相なので次

「……あんたが仕組んだんだろう……」

は～い次ね～！（無視）

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

六話目ですね。
主にドタバタです。ただ単に自分がドタバタを書きたかっただけなんです許して下さい。後半の出来事は今後色々と関わってきますね～

「あの女の子は一体……」

まぁ、後々分かってきますよ。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

七話目、軌跡の過去にまつわる話です。
これ以上は言えません。　すみません。

「雅樹がやられた知らせを美穂から聞いた時はビックリしたな〜」

先、進みますから！

「おいっ！！ちょっまっ……」

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

八話目、軌跡が寝ている間の出来事です。
癒亜と雅樹のデートのお話ですが、雅樹は殺されかけましたね、はい。
最初、雅樹はもっと体中を切り刻まれる予定でしたがあまりにも可哀相なので腹だけにしました。

「あんた……ひでぇな」

仕方ないさ。
自分的にはグロいの結構好きだからね。

「本当にひど〃うるさいから次いきまーす。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

九話目っすね。
遂に軌跡が壊れましたーーー！！！！！！
いつか狂わせたいとは思ってたんですよね。
赤井は逃げましたね。

「あんたはどれだけ俺達を苦しめたいんだよっ！！」

聞こえない、聞こえない　僕には聞こえないよ。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

十話は軌跡の逆襲劇です　みどりっちは最初は軌跡を足止めしようとしました。でも最後には軌跡に行けとみたいな事言いました。
この矛盾についてみどりっちに聞いてみました。

「………軌跡が俺の事を思い出してくれたのが嬉しくて……つい」

と、言うことだそうです　では、ラスト！

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

十一話目、一章ラストです。

この時は学園都市に上条さんがいないという事でお願いします。
いたら赤井の幻覚なんて　一発で終わりですからね

「あぁ～あんときはもう疲れきっててよく思い出せないな～」

大丈夫。
多分読者の皆様は分かっていると思いますから。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

という事で、一章を振り返ってみました。
何か気になる点があるなら何でも聞いて下さい。

では、キャラ設定です。

☆★☆キャラ設定☆★☆

氷宮軌跡（ひみやきせき）高校一年生
第一話登場
絶対領域（アブソリュート）
事情、領域、思考の３つの人間が認識できる範囲内の動きを固定、
確定、阻害する事が出来る。

鶇夜雅樹（つぐみやまさき）
高校一年生
第二話登場

鍵閉封鎖（ディーキー）　自分の手の動きにリンクした相手の空間を凍らせる事が
出来る。あまり多用すると三日間眠りかける。

篠原美穂（しのはらみほ）
高校一年生
第二話登場
存在消去（デリート）
一時的に指定した範囲を指定した時間だけ別次元へ飛ばす。いわゆ
る四次元ロッカー。あとの被害を考えて使わないと大変な事になる。

白戸翔子（しらとしょうこ）
高校一年生（癒亜の双子の妹）
第三話登場
武器変換（ビーチェンジ）
あらゆる物質を手に触れただけで武器に変えてしまう。重量も使用
者に合わせて変えられる。

白戸癒亜（しらとゆあ）　高校一年生（翔子の双子の姉）
第三話登場

武器操作（ビーコントロール）

あらゆる物をある程度の物なら三つまで同時に操れる。だが多用すると疲労が凄い。

緑誠夜（みどりせいや）　高校一年生

第五話登場

虚無反転（ゼロリバース）

左手に触れた物質を空気とする事が出来る。空気中に溶け込んだ物質を取り込みまた別な物にする事が出来る。

赤井雄大（せきいゆうた）

高校一年生

第二話登場

壮絶幻覚（グロリア）

幻覚をかけさせる相手に右手を見せる事で初めて発動する。様々な演算パターンから色々な幻覚をかけることが出来る。

赤井美遊（せきいみゆ）　中学二年生

第五話登場

能力補助（スキルサポート）

色々な能力の限界をこす事ができる。発動条件はサポートする能力者に両手を当てる事（まだ力が弱いため両手をあてなくてはいけない。成長すれば遠距離からでも使えるようになる）

★キャラ設定&裏話☆（後書き）

こういうキャラ設定です　これからまだまだキャラは増やしていくつもりですので宜しくです。

では、二章も宜しくお願いします！！！

警備員達（アンチスキルズ）（前書き）

二章始まりました。
この話を投稿するのにえらい時間がかかりました。
どうかこれからも宜しくです。

警備員達（アンチスキルズ）

8月1日

病院で目覚めてから四日後、俺は退院し家で漫画を読んでい。
さすがに雅樹と美穂は俺が退院した後だから遊びには来なかった。
来ないと来ないで少し寂しかったが、今は一人でいたい気分だ。

それにしてもあん時のあれは何だったんだろうか？
空間爆発（アブソリュートフォース）に空間凍結（アブソリュートゼロ）・・・
どちらもとてつもない威力だった。
しかも、共通しているのはどちらも記憶が蘇った時に使えた事だ。
この二つについては自分でも分からない事が多すぎる。
みどりっちと赤井の記憶が蘇ったせいで俺の過去があやふやになった。
俺は今、頭の整理が全然ついていない。

ピンポーン

と、何の前触れもなく家のチャイムがなる。
俺は立ち上がり玄関へと足を運ぶ。

「はいは～い、今行きますよ～」

そう言って俺は玄関を開けた。
だが俺は後悔する事になる。
なぜなら、俺の家のチャイムを鳴らしたのは、

「警備員（アンチスキル）の者です」
そう、紛れもない警備員だったからだ。
その警備員の男はとても若かった。
年はみた感じ２０いっているかいっていないかで黒く落ち着いた髪、
身長は長身でスラッとしている
「なっ、なんのご用で？」

はっきり言うと俺は警備員は大の苦手だ。
過去に色々とお世話になっているので。

「先日、近くの公園で君の血痕が残っていた。しかも大量に、何があったか聞かせてもらいたい」
ヤバい……めちゃめちゃ説明に困る事を聞いてきやがった。

「どういう事だぁ～！！」
男の後ろからひょっこっ、と出てくる女の子。
「茜（あかね）！！事情聴取の邪魔をするな」

「うるさいなぁ～、闕矢（いきや）は黙っててよ～」

「それこっちのセリフ」
何だか口喧嘩が始まってしまった。
こいつら本当に警備員なのか…？
つってもまだ二人共若いから仕方がないのか。
という事で、

「お取り込み中の様子なのでさよなら～」

玄関をゆっくりと閉めようとしたが甘かった。
闖矢と呼ばれた男と茜と呼ばれた女がドアを掴んでいる。

「「なに逃げようとしてんの？」」

こっ…こえーー！！！！！
この人達からは簡単に逃げ出せねぇ。

「それで話を戻そうか。あの公園で何があったの？正直に言いな」

「えっ、えっと…あのですね…」

「はっきり言え。こっちだって君を連行したくないんだよ」

連行！！??
聞いてないぞ！！！！！
でも正直に言ってしまっていいんだろうか………
ブゥーン、ブゥーン

と、携帯のブザー音が鳴る。
おっと、という闖矢。
その携帯は闖矢の物みたいだ。
携帯をポケットから取り出し、耳に当てる。
どうやらスライド型らしい。

「えっ……あっ、はい。今行きます！」

ピッ

「茜、事件だ。いくぞ」

「えぇっっ！！！この子は～？」
女の方が俺を指差す。
その行為に何となくムカつく俺。
「また後で聞けばいいだろう？今は事件優先だ」
「はぁ～い」
しぶしぶ答えた女は男に向かって走っていった。
「また来るから覚悟しとけよ～」
そう言い残し、去っていった二人の警備員。
ひとまずは難を逃れたな、俺。

――――――――――

事件現場：とある銀行

「何があったんですか、黒松(くろまつ)さん？」
「ここで強盗があった」
「まあ、銀行ですものね。犯人は？」
「まだ分かっていない。あと強盗だけなら良かったんだが…」
「どうしたんですか？」
「人が死んだ」

えっ…死んだ？
闘矢は今までに色々な事件の現場で死人が出たところは見た事がなかった。だから闘矢にとって今の現場は発境地なのである。

「人が……死んだの？」
ここにも発境地のやつがいた。
そう、茜も闘矢の同期で同じ仕事についているので死人が出た現場など見たことがないのだ。

「しかも一人や二人じゃ済まない」

黒松と呼ばれた男はため息混じりに、

「死人者２７名だ」

「そっ、そんなに！！？？」
「うっ……うそ……」

二人は怖くなった。
自分達のいるこの現場がとてもとても怖くなった
「今もなお、犯人は逃走中だ」

二人の耳にはその言葉は届いていなかった。
でも、二人は目の前の現実を受け入れていかなければ警備員（アンチスキル）なんて仕事出きるわけが無いからだ。
１９歳で受け入れるにはまだまだ早いと思われるが。

「僕、犯人を絶対に捕まえます」

「ウチもです。捜査に協力させて下さい」

二人の決心の言葉に黒松は嬉しそうに、
「宜しく」
と、呟いた。

とある路地裏……
――――――――――――
「金だ金～これで俺は金持ちだぁ、ヒャハッ」
その路地裏には銀行強盗の犯人と思われる人物がいた。
「でも、人を殺し過ぎたかな？まぁいいか」
いっけん独り言をぶつぶつ言っているようにしか聞こえないがちゃんとその場には聞き手がいた。
「協力した私にも分け前として、3割もらう」
「3割だけでいいのかよ？随分と欲がねぇな～」
そう言うと盗んだ金がどっさりと入った袋から沢山の札束を放り投げる。
ほらよ、と言わんばかりに放り投げる。
きっと3割は軽く越してはいるだろう。
「ありがたく受け取る」
そして札束を両手いっぱいに抱え込む。

「でもあんた、何で金が欲しくないんだ？」

「私は金ではなく、人間の死体が欲しいのだ」

「でも、人間殺して何するんだい？あっ、あがいつ……何だっけ？」

「アーカイツ＝ウェンドルだ。生け贄に使うのだ、お前は分からなくていい」

さっかからこのアーカイツというヤツから出る言葉は全部感情が籠もっていない。
まるでロボットが喋っているような感じだ。

「まぁ、いっか。次はどこを襲うかな？」

男の顔がニタァーとにやける。
すごく不気味だ。
だがその不気味さはこの男の年齢からはとても考えられない程におぞましいのだ。
この男の名は絶川蝉朗（たちがわぜんろう）。
歳はまだ若く、21だ。髪は肩までかかるくらいまであり、漆黒の黒と呼んでいい程に真っ黒な髪の色。
身長は170後半。

一方アーカイツ＝ウェンドルは髪の色は金髪で、目が前髪に隠れている状態。
背は高く軽く190後半ぐらいであろう。
とにかくスラッとしている。

「次はもっと人を殺せる所が望ましい」

「んじゃあ、どうする？」

「なら次は…」

アーカイツがテーブルに置いてあるある地点を指差す。

「ほぅ、なかなかいい場所選ぶじゃないか。いいぜ次はそこだ」

「なら、決まりだな」

その夜のとある路地裏からはとても不気味な笑い声が一晩中響いたそうだ

警備員達（アンチスキルズ）（後書き）

最近疲れてダメです。
眠いです。

ではまた次話で〜。

事件発生（ピープル）（前書き）

投稿遅くなってすみません。やっとテストが終わったので投稿しました。

事件発生（ピープル）

8月2日
早朝　9時頃

第七学区に、早朝から開いているスーパーマーケットがある。
そのスーパーマーケットは店が開くと同時に、タイムセールが始まる。
多くの学生達はそのタイムセールを逃すまいと、　訪れる。
タイムセールは週一ペースで行われる。

8月2日。
この日が週一に行われるタイムセールの日であった。

押し寄せる学生達。
店の商品でもめ事、それがデッドヒートして戦争になっているコーナーも所々見える。
だがそれはまだマシな方だったかもしれない。
今からこのスーパーマーケットに起きる惨劇を考えると……

「おい！！それ俺が最初に取った焼きそばパンだぞ！！返せよ！！」

「俺が最初に取ったんです～～！！」

あるパンのコーナーで最後の焼きそばパンをめぐる争い。

今にも戦争になりそうだ

「あんだと！！？？」

「やんのかよ！！？？」

両者にらみ合っている。　パチパチと火花が散っている音が聞こえてきそうなほどににらみ合っている。

そこに金髪で目を前髪で隠した長身の男がやってくる。

すると、男の手にあったはずの焼きそばパンがいつの間にか無くなっていた。

「お前食っただろ！！！！」

「俺は食ってねぇぞ！！お前が食ったんじゃのねぇのかよ！！！？？？」

「お前の手の中にあるのにどうやって取るんだよ！！！？？」

二人が口で言い争っていると二人は自分達の周りにずっといた長身の男に気づいた。

その男を二人は見つめる

男の手にはさっきあったはずの焼きそばパンが握られていた。

「おいてめぇ、それは俺の焼きそばパンだぞ！？返しやがれっっっ！！！！」

キレた男が金髪長身の男に殴りかかる。

だが、その拳は宙をからぶる。

金髪長身男は一瞬でその拳をかわして殴りかかってきた男の背後に移動したのだ。

そして、

ピシッ

金髪長身男が指を鳴らす　すると、

「てめぇら全員俺の血となり肉となりやがれっッ！！」

スーパーマーケット店内に凄く響く声を出す殺人鬼。

ビシャァァアッツ

スーパーマーケット店内の至るところから血が飛び出る音が鳴り響く。

こうして朝のスーパーマーケットは血の海と化していったのだ……………

「血の採取は完了した。……何をやっているんだ？次、行くぞ」

「犯行予告書いてるんだよ、ひひっ！！」

○●◇◆———

それから少し時間がたった頃…

「これは酷い……」
「……やだ……」
「今回ので死亡者５０名だ……やられた」
血の海現場には警備員（アンチスキル）の闘矢、茜、黒松が近所の人の通報により駆けつけていた
「犯行の仕方から昨日のヤツと一緒だ」
「犯人のせいで７７人も…俺が早くに気付いていたら…クソっ！！」

闘矢は地面に自分の拳を叩きつける。
闘矢は自分が何もできないと知ると、全部自分の責任として受け取ってしまう性格だ。

「仕方ないよ……悪いのはこれをやった犯人なんだから……」
「そうだ闘矢、お前が責任を感じる事はない」
「はい……少しあたりを見てきます」

そう言い残して闘矢は一旦事件現場から離れ、スーパーマーケットの近くを見回ろうとした。
自分の気持ちを落ち着かせるために。

ぴたっ、といきなり闘矢が立ち止まる。

これは・・・何だ？

闘矢が見つめるその先にあったのはスーパーマーケットの裏に小さく人の血で書かれた英語の文字であった。

『Ｋｉｒｕ　ｂｌｏｏｄ　Ｔｏｋｏｙａｍｉ　ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌ』

キル、ブラッド、常闇高校。
ただ単語を並べただけの文字だ。

常闇高校……っ！！！

闥矢は常闇高校という言葉にピンと来る。

「軌跡……いてくれよ！！」

闥矢は走り出す。
向かう場所は昨日行った軌跡の家。

『常闇高校(とこやみこうこう)』

それは軌跡や雅樹、美穂の通う学校だ。
軌跡のプロフィールに『常闇高校』と書かれていたことを闥矢は思いだしたのだ。

「どうしたの闥矢！！」

走り出している闥矢に声をかける茜。

「急がなきゃいけないんだ！！」

そう言ってその場を立ち去った闘矢。

○●◇◆……

「ねみぃ～」

この声の主は軌跡だ。
軌跡は今日も家で1日を過ごす予定であった。
ふとんから起きると軌跡はテレビの前にいき、電源をつけ、チャンネルをまわす
どこも同じニュースでもちきりだ。
だから仕方なくそのニュースを見てみる。

『昨日、第七学区にある銀行で強盗事件が起こりました。しかし、強盗の他に犯人は殺人も犯しました。死亡者は27名です』

それは昨日の事件の事であった。

「あの警備員（アンチスキル）が言ってた事件ってこれかぁ～、てか死亡者出たのかよ。しかも27人って……」

軌跡が驚いていると、ニュースの話題が変わる。

『只今はいりました。今日、9時頃第七学区のとあるスーパーマー

ケットで殺人事件が起きたそうです。犯行の仕方をみると、銀行強盗の手口と似ているという事で、同一人物と考えています。死亡者は５０名です』

軌跡は目と耳を疑った。　そのスーパーマーケットとは軌跡の近所だったのだ。
そして死亡者５０人……　軌跡は口をポカンと開けて機動停止した。

ピーンポーン

と軌跡の家のチャイムが鳴り響く。
口を自分の手で閉じ、玄関へと向かい、ドアを開ける。
そこにいたのは息を切らした昨日の警備員（アンチスキル）であった。

「軌跡……居た……良かった……」
ドアを思いっきり閉めようとしたが、また手で止められる。
「……来いっ！！」
闘矢が軌跡の手を掴む。　そしてそこから連れ出す闘矢。
とても強引であった。
「何で？遂に俺刑務所行きなの？」
「知らん！！後で話すから行くぞ！！」
軌跡は闘矢に強引に連れて行かれた。

◆◇●○

「なるほど、大体分かったよ……えっと…闓矢だっけ？」

「そうだ」

「俺が思うに今は夏休みだぜ？」

闓矢の表情に焦りが見えた。

「まさか、分からないで……？？」

下を向く闓矢。
夏休みという事にきっと気づかなかったのであろう。
それを見かねた軌跡が少しフォローに入る。

「あっ……でも補習はあるかもな」

「補習……？なるほど、犯人はその時を狙ったのか……」

「どういう意味だ？」

「補習だと必要以上の先生はいない。だから狙いやすい」

「なるほど………あっ」

軌跡が何かを思い出し、ふぬけた声を出す。

「美穂、今日補習だ…」
「友達・・・なのか？」
「大事な友達だよ……こうしゃいられねぇ！！！」

○●◇◆……

常闇高校―補習室

「はぁ〜、やる気でな〜い」

補習室で美穂は嘆いていた。

「緑…、アンタよく補習なんてやってられるわね」
「………勉強は嫌いじゃない」
「じゃあ何で補習してんの？」
「………やらないだけだ」
「ふーん。あっ、この前はゴメンね」
「………痛かったし、アノ後の補習地獄だった……」
「本当にゴメンっ！！」

この前の股関に蹴りを入れた事について謝る美穂。ちゃんと罪悪感があったようだ。

「それにしても何か賑やかだね、今日は」

さっきから学校から色々と物音がしているのだ。　そしてそれを引

き起こしているヤツが補習室に近づいていているなんてこの二人はまだ気付かなかった。

カタ……カタ……

不気味な足音が聞こえてくる。
もちろん二人には聞こえていない。

カタ…カタ……

どんどん近づいてくる。　そして、

ガラガラガラ

補習室のドアを開ける音　。

二人は音がしたドアを見る。
そこにいたのは昨日と今日の殺人事件の犯人が立っていた。
「こーんにーちはーで、さよーならぁぁぁっっ！！！！」
犯人が戦闘態勢ができていない美穂と緑に襲いかかろうとする。
だが、

「そこまでだ、殺人事件の犯人よ。お前を殺人の容疑で逮捕する」

「良かった……間に合って……」

軌跡と闘矢がナイスタイミングで登場。
そして軌跡の一言。

「覚悟しろよ、犯人さんよぉっ！！」

事件発生（ピープル）（後書き）

最近、一方通行（アクセラレータ）さんが凄くカッコよく思えて仕方がありません。

絶対絶命（エンスター）（前書き）

一方通行さんも好きですが御琴も好きです

絶対絶命（エンスター）

「奇跡っ！！」

「………なぜここに？」

美穂とみどりっちが俺がここにいる事に驚いているようだ。
もっと他に驚くべき事があるんじゃないかな？

「なんだお前ら？」

犯人が俺達に向かって聞いてくる。

「僕は警備員（アンチスキル）の青峰闘矢だ」

「俺は氷宮奇跡。犯人、お前の名前は？」

仕方ないとばかりに自分の名前を口に出す犯人。
「俺の名は絶川蝉朗（たちがわぜんろう）、自己紹介は面倒くせーからしねーからな」

絶川蝉朗………こいつが７７人もの人間を殺した殺人鬼。
予想していたより若かかったのが俺の本音。
正直いうとこんなやつが７７人もの人を殺したとは考えられない。
どうやら闘矢も同じ事を考えていたようだ。

「闘矢っ！！あんたは下がってろ！！」

「何でだよっ！！僕もたたか――――」

「能力者じゃねぇあんたがここにいたって邪魔になるだけだ！！！」

闘矢は何かを言おうと思ったようだが、我慢して口を閉じる。

「……分かった」

「ごめんな……」

色々やりとりをしていたから犯人がもう待てないご様子で

「さっきっからゴチャゴチャうるせんだよっ！！」
「どうやら犯人がお待ちかねのようだ！！美穂！！みどりっち！！戦闘態勢にはいれ！」

「後でゆっくり事情を聞かせてもらうからね！」
「………まずはコイツを倒せばいいんだろ……」

「そうだ、行くぞっ！！」
この補習室に三人の能力者が集った。
俺達三人が力を合わせて戦えばきっと勝てるだろう………そうこの時は思っていた。
俺達は犯人を見くびりすぎていたのだ。
この時は………

まずはみどりっちが一歩踏み出す。
そして左手を犯人に向かって突き出す。
みどりっちの左手に触れた物は何であろうが空気に変えてしまうのだ。
だが、蝉朗はみどりっちの左手が体に触れる前に体を横へずらし左手でみどりっちの左腕を掴む。　みどりっちの能力が発動するのは

左手に触れた時だ。
この場合、直接左手に触れていないので蝉朗の左手は空気とはならない。
「………なぜ、弱点を……？」

そう、不思議なのは何故一度も接触もした事もない蝉朗がみどりっちの能力の事を知っているのか……？

「雑魚がっっ！！！」

ガンッ！！！！！
蝉朗の右の拳がみどりっちの背中にめり込む。
「………ぐはっ」

みどりっちは思いっきり吹っ飛び、補習室にある机に何度が衝突しながら補習室の壁に叩きつけられる。
もちろん一発ケーオーだ
「えっ………！？」

気がつくと蝉朗は美穂の後ろに回っていた。

「女にゃああんまり手ぇあげたくないんだが、存在消去はちと厄介だ」

美穂の腹に右手をめり込ませる蝉朗。
美穂もケーオーだ。

「残るはおめぇだけだ」
そして俺だけになる。

俺は何もしていなかったわけじゃない。
蝉朗が一歩踏み出そうとしたようだがもう遅い。
「死の領域（デスゾーン）、これでお前は動けねぇよ」

「へっ、こざかしいマネしやがって」

なぜだか蝉朗から余裕を感じる。
何か……あるように……
「よいしょと」

「動いた…だと！？」

前にも赤井と戦った時に打ち破られた事があった　…だがあの時は
幻覚にかかっていたからだ。
今回は違う。
明らかに違う。
幻覚にかかってもいないし、死の領域を使う場所も完璧だった。
なのに……コイツは……

「アーカイツからもらっといて良かったぜ〜」

「何を――――」
と俺が言いかけた瞬間
バゴンッッ！！！！
とてもとても鈍い音が補習室に響き渡った
気がついた時には俺は宙を舞っていた……
ガス！！
地面に叩きつけられる音　それから俺の意識は遠のいていった―――

「後はコイツラに全員ナイフを突き刺せば終わりかな？」

ひひひ、と蝉朗はとても冷たくて不気味な笑い声を上げながら右手にナイフを持ち、倒れている緑、美穂、奇跡へと近づいて行く

「もうやめてくれ…」

その声がした方を向く蝉朗
そこにいたのは警備員の闘矢であった

「これ以上やるというのなら、今度は僕が相手をする」

これでも闘矢は警備員だ　それ相応の体術は身につけている

「お前が俺と？」
「そうだ」
アハハハハハッ！！、と腹を抱えて笑い出す蝉朗
「警備員がこの俺とやろうってか！？能力者でも勝てない俺に？笑わせるなよ！！」

アヒャヒャヒャ、大声をたてってまだ笑い続ける蝉朗

強気な闘矢だが、心の中ではとてつもない『恐怖』に襲われていた
僕は本当に勝てるのか？　奇跡達能力者を瞬殺したこの男に…勝てるのか？
恐怖で足がすくんでくる闘矢
そして体全身が震えだすその震えが止まらなくなる

「震えてんじゃねぇかよっ！！戦えんのか、オイ！！」

くそっ……僕はいつもそうだ…こんな大事な時に限っていつもコレだ

だからあの時も…………救えなかったんだ

このままだとあの時みたいにまた、大事な物を失う事になる
それだけは絶対に――
ふと、闘矢の頭に何かがよぎる

――――

「闘矢……俺の分まで…よろしくな…」
「おいっ！やめろよ鉱！死ぬなよっ！！」
「お前なら…立派な警備員に……なれ……る」
「鉱っっっっ！！！！」

――――

「うわぁぁぁぁっっっ！！！！！！」
闘矢がいきなり叫び出す　その叫びはとてもおぞましく、とても悲しい叫び声に聞こえた
「遂に狂ったか？」
叫びが終わると闘矢は顔を上げる

不思議な事にいつもは右目に前髪がかぶさっているのに、今は左目に前髪かぶさっている状態になっていた
そしてその右目は真っ赤な色をしていた
綺麗…とは言いたくないがそれほどに赤く輝いていたのだ
「久し振りやなぁ、こっちにデルのは」

闔矢はさっきとはまた別な喋り方で喋り出す
その声はいつもの闔矢の声より1トーン低かった
「お前…さっきの警備員だよな？それにしては喋り方が…変わった？」

蝉朗は闔矢の異変気づく　なんせさっきまでの闔矢とは明らかに色々なモノが違かった
腰を落とし、下から相手を見つめる赤き眼光
何というか分からない喋り方
明らかに違う

「ここじゃあ、戦いづらいなぁ……」

そう言うと闔矢は一瞬のうちに蝉朗の首の根を掴み上げ、どこかへと連れ去る
蝉朗は自分でも気付かれ無い内に自分の背後に回られ、首の根を掴まれた事に驚愕した

「てめっ……!!」

「あんまり喋らんほうがえぇで、間違ってアンタの首潰しそうやから」

蝉朗は抵抗できないまま……そのまま闔矢にどこかへ連れていかれた

奇跡、美穂、緑しかいなくなった補習室
そこにまた、新たな人物がやってくる

「蝉朗よ、ご苦労。能力者の血の採取、じっくりとさせてもらうよ」

そこにやって来た人物
それは、アーカイツ＝ウェンドル
蝉朗が奇跡達と戦闘を繰り広げる中、補習に来ていた生徒の血は採取したらしい
そして残るは奇跡達だけだったのでこの補習室に来たのだ

ゆっくりと、ゆっくりと奇跡達に近づいていくアーカイツ
そして奇跡の側まで来てしまった
腰からナイフを取り出し、奇跡の顔の右反面を切り裂く
普通なら痛さで意識を取り戻すだろうが、アーカイツは切り裂く前に奇跡の顔に麻酔をうっていたので、騒ぐ事なく血を採取した
かなりの出血量
死に別状はないと思うが結構な量ではあった

「後は００２と００４だ」

アーカイツがナイフで美穂の体を切り裂こうとした時

パリンッッ！！！！

補習室の窓が勢いよく割れる

アーカイツが驚きナイフを床に落とす

そして窓のに視線を移す視線の先にいた人物は――――

「は～い奇跡、元気してる～？」

壮絶幻覚（グロリア）を使う能力者、赤井雄大であった

絶対絶命（エンスター）（後書き）

最近疲労が凄いです。
色々疲れる時期だからですかね～

幻覚再び（アクティブ）（前書き）

久し振り？の赤井の登場です。

幻覚再び（アクティブ）

補習室に突如現れたのは　軌跡と対峙したあの赤井雄大であった

「やっぱりやられてたか…軌跡もみどりっちも」

やれやれといった顔で一人呟く赤井。右手で自分の真っ赤な髪の毛をくしゃくしゃにする

「なぜ００５、お前がここにいる？」

アーカイツが言った言葉に赤井は眉を少しひそめる

「俺の番号を知ってるって事はあの研究所の使いか…」

と、アーカイツに聞こえない呟く

そして

「『スタート』の仕事だからね」

「『スタート』…そうか、００７の依頼か」

「つーことで、使徒（しと）ちゃんの命により軌跡達の援護とアンタの抹殺を開始しま～す」

そう言うと赤井はアーカイツに向かって、右手をかざす。赤井の能力、壮絶幻覚（グロリア）は相手に右手を見せる事で発動する能力だ

「そんなの分かりきっている」

それにもかかわらずアーカイツは赤井に向かって突進していく
赤井はその突進を避けようとしない。なぜなら幻覚にかかっている
と思ったからだ。
しかし、

「ぐはっっ…な…んで？」

幻覚にかかっているはずのアーカイツの体が赤井の体に直撃したのだ
後方にぶっ飛ぶ赤井。補習室の窓に叩きつけられる
幻覚にかかっていない事を不思議に思った赤井はアーカイツの方を
見る

「な…んだと！？」

なんとアーカイツは目をつぶっていたのだ。壮絶幻覚は右手を見た
ら発動する、ならば目をつぶればいい、という考えであった
ここでまた一つの疑問

なぜ赤井の能力を知っているのか？

さっきいた蝉朗も緑の能力を知っていた。これと何か関係があるの
か？
赤井には大体予想はついていた

「まあいいか…」

そう言って赤井は自分の体を起こし、戦闘体勢に入る

「無理やりにでもその目、開かしてあげるよ」

赤井がアーカイツに向かって右手でパンチを仕掛ける。だがアーカイツは目をつぶっているのにもかかわらず、簡単によける

「もういっちょ」

今度は左手でアッパーをかけるが、後ろに一歩下がりそのアッパーがからぶる

「あ~もう！めんどくさーーーい！！」

言葉の通り面倒くさくなった赤井は右、左、右、左と交互にパンチを繰り出すがなんなくかわされ、たまにリズムも変えて繰り出してみるがそれも全て読まれてかわされる

「こんなものなのか、００５の力は」

目をつぶり、自分のパンチをよけながらも挑発するアーカイツに赤井は少しキレる

「この野郎っ！！！」

最後に思いっきり蹴りをいれる。だがしかし、その蹴りもなんなくかわされる。そしてアーカイツはアクロバティックな動きで赤井と距離を置く

「そろそろ終わらせる」

そう言うとアーカイツは腰から何かを取り出す

「まさか目をつぶったままでそれを？」

アーカイツが取り出した物は紛れもない拳銃だ。　アーカイツは目をつぶった状態で赤井の体を撃ち抜こうとしているのだ

「そのつもりだが」

赤井の声がした方へアーカイツが拳銃を向ける。

「マジかよ」

そう赤井が呟いた瞬間に拳銃の引き金がひかれる　。それも一回や二回じゃない、何回も何回も弾が無くなるまでアーカイツは赤井を撃ったのだ

バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！

補習室に鳴り響く無数の銃声。この弾が全部赤井に当たったたかと思うともう肉片しかそこには残ってないだろう

アーカイツがゆっくりと目を開ける

「やっと現実に帰ってきたね〜、幻覚はどうだった？」

そこには全くもって無傷の赤井がそこにいた。そしてアーカイツの体のあちこちが痛み出す。よくみると体のいたるところに銃で撃たれた後があった

「なぜ？」

思わず口から出た一言。無理もない、赤井に撃ったはずの弾全てが

自分の体に撃たれているのだから
(幻覚？だが、一度も右手は見ていないはず…)
「アンタ『自分は右手を見ていない』って思ってるでしょ？」
アーカイツは今までに起きた事を振り返ってみる。しかし右手をみた覚えはなかった
「誰が『右手を見れば幻覚にかかる』なんて言った？」
「まさか…」
アーカイツは今言った事とさっき言った事、それと今までの事を全て照らし合わせる。そして一つの答えにたどり着く
「そのまさかさ」
アーカイツが導き出した答え。それは『能力の成長』、つまり赤井は右手を見せなくても相手に幻覚を見せられるようになっていたのだ
やられた、という顔をするアーカイツ。そして傷だらけとなった体を必死に起こし、
「005よ…お前は必ず殺す」
と言い残しどこかへと消えていった
「軌跡達は助けたけどアイツの抹殺は失敗しちゃった」
拍子抜けた声で一人呟く赤井。そして軌跡のすぐ側まで足を運ぶ

「あんなクソみたいなヤツにやられるなんてまだまだだね」

r:i r:i r:i r:i r:i r:i r:i r:i!!!

赤井のポケットからいつの時代か分からないような機械音が鳴り響く

その携帯をポケットから取り出し、耳に当てる

「はいは〜い」

『ご苦労様〜、もう帰って来ていいよ〜』

携帯電話から聞こえるおっとりとした声

「分かったよ使徒ちゃん、今から帰るよ」

『気をつけてね〜』

携帯をポケットにしまう赤井、そして赤井は軌跡の方を向いて一言、

「強くなれ」

そう言って両手を両方のポケットに突っ込み、赤井は補習室から去っていった

――――

赤井とアーカイツが戦闘している時の屋上

「ここでええわ」

闘矢？が蝉朗放り投げる　。屋上をゴロゴロと転がる蝉朗、そして起き上がる

「てめぇ…」

「わいの事、知りたいんやろ？」

にひひ、と笑いながら言う闘矢。その顔からはいつもと違う闘矢が見られた

「気になるに決まってんだろ！！てめぇは誰なんだっ！」

蝉朗が闘矢に向かって大きく言い放つ。その言葉からは少し焦りが見えた

「『二重人格』って言えば分かる？」

「二重人格…そういう事か……」

闘矢の言葉から放たれた言葉は『二重人格』

そう、闘矢は『二重人格』なのだ

「そうそう『二重人格』。そしてわいは裏の闘矢、まぁ裏闘矢って事や。よう覚えておき」

（二重人格だなんて初めてしったぞ…この警備員…あなどれない）

「つーことや、わいに逮捕されろ」

「嫌だと言ったら？」

「ゆーと思ったからここへつれて来たんや」

裏闖矢は蝉朗に飛びかかる、だが蝉朗は独自の身体能力でなんなく横へかわす。そして蝉朗は顔面に蹴りをいれる、そしてそれを空中でジャンプしてかわす裏闖矢

闖矢と蝉朗が二人同時に距離を置く

「なんやお前、肉体改造しとるな？」

「それはこっちのセリフだ！性格が変わっただけで身体能力上がってんだろーが！！」

裏闖矢と蝉朗はお互いに納得いかない点を言い合う

「もうええわ、決着つけるで」

「俺も今言おうと思ったぜ」

二人は体勢を整え、次に勝負をかけるつもりで力をこめる

「いくでぇぇっっ！！」

「うおぉぉぉっっ！！」

裏闖矢と蝉朗がぶつかり合う。とてつもない爆風が屋上一帯をおおう。煙りの中に立つ人影が一つ、その人物は…

「やっぱりわいのほうが強いわな」

裏闐矢だった
煙りがはれていく…裏闐矢のすぐ側で倒れている蝉朗
「あぁ、言い忘れとったが…」
倒れている蝉朗に裏闐矢がわざとらしく
「わい、能力者やから」
ニッ、と笑みを見せて蝉朗のすぐ側に倒れこむ裏闐矢
「もう少し…こっちにいたかったわ…」

幻覚再び（アクティブ）（後書き）

自分的にはみどりっちが一番好きですね、はい。

みどりっちが好きな人は手を挙げて〜！！

あれから（前書き）

時間がかかってしまってすみません。
今回の話はかなり会話文が多いです。すみません。
自分に文章力が無い証拠ですね…………

あれから

あれから軌跡達は駆けつけた警備員達によって病院に運ばれた

アーカイツに軌跡は右反面を切り裂かれたので、右目が使い物にならなくった…いや、目が見えなくなったと言った方が分かりやすいであろう。軌跡が目を覚ましたときにはもう無かったのだ。軌跡は誰にやられたか分からない事がとても悔しかった

緑はかなり重傷だったらしく、三日間眠りっぱなしだったという

美穂は腹をえぐられただけだったので、軽症で済んだという

闥矢は蝉朗と一緒に屋上で発見されたという。蝉朗はその場で警備員に逮捕されたという。闥矢は精神的にダメージを負っていたらしい

「はぁ〜、何だかんだで疲れたな」

軌跡は自分の部屋で仰向けになって天井を見ていた

ふと、軌跡は右手で自分の右目を触る。包帯のざらつきが右手から伝わってくる

「本当に…無いんだな」

軌跡は顔の右反面を切りつけられて右目の視力を失ったのだ。この時点でなら使えなくなった眼球収まってはあるのだが、それを軌跡は「とってくれ」と言ってとってしまったのだ。だから今の軌跡の右反面には眼球が無い。その眼球はケースに入れていつも持ち歩いている

「闥矢…アイツよく犯人を倒したな…。まあだてに警備員やってにな

いか」

軌跡は闕矢の他に緑の事も考えたが、何となく考えるのを止めた

（あれは…本当に赤井だったんだろうか？）

軌跡は途中までは意識を失っていなかった。誰かに右反面に麻酔をかけられて切りつけられた事には覚えがあった。そして美穂に誰かが近づいた時に一人の青年の声が聞こえたのだ。そしてそこから完全に意識を失ったのだ

（あの声は赤井のような気がしたんだけどな……それはないか）

軌跡は部屋にあったデジタル時計を見る

ＰＭ　２３：５７

（もう、今日が終わっちまうのか…早いもんだ）

『今日』、氷宮軌跡は右目を失った――

（そろそろ寝るか…）

視力を失ったのは軌跡の意思ではないが、眼球を取ったの軌跡の意志だ。軌跡は自分の愚かさに絶望し、右の眼球を取ったのであろう

果たしてそれは正しい判断だったのか――？

ＰＭ　００：００

軌跡の家の明かりが消えた。

──とある研究所

「はぁはぁ……」

「お帰り、アーカイツ。傷だらけじゃないか」

研究員らしき人物がアーカイツに手招きをする。それに導かれるように進み出すアーカイツ。

「００５に…やられた」

アーカイツは全身に酷い傷を負っていた。
それにも関わらずこの研究所まで足を引きずらせ、息を切らしながらやってきたのだ

「それにしても酷い傷だね〜…灯傷(あかり)の手当てを」

はい、と灯と呼ばれたまだ若い研究員はアーカイツのとこに行き、傷の手当てを始めた

「血の採取はできたの？」

「ああ…ここに一人ずつ区別して入れてある」

そう言うとアーカイツは来ていたジャンバーをバッ、と広げる
そこには約１００本近くの小さなビンがギッシリと詰まっていた

「あと、これは特別だ」

そう言ってアーカイツはハンカチでしっかりと包まれてある小瓶を
ポケットから取り出し、灯に渡す

「００１の血だ…」

「ごくろう」

手渡された小瓶をもう一人の研究員に渡す

「００１の血だそうです、氷宮（ひみや）さん」

「どーも」

それを静かに受け取る氷宮と呼ばれた研究員
そしてその小瓶を小さな倉庫に入れた

「にしても００５には驚いたよ～」

「ですね。やはり００５の行動は計り知れません」

「まさか右手使わずに壮絶幻覚（グロリア）を使えるようになったなんてね～」

「恐るべき高校生」

灯と氷宮が赤井雄大の事についてぶつぶつと話し合っている

「あともう一つ驚いたのが、００５が００７のとこにいた事だ」

「００７…ですか。最近聞いた『スタート』とかいう暗部のリーダーらしいですね」

「そうだよ、裏でいつも働いてんのよあの子は」

「そういえば…００８も何かを……」

「それは『ブレイク』ね、００８は『ブレイク』のリーダーやってんのよ」

「あの『暗部潰し』の？」

「そだよ、ちなみに００９は私達の味方だから大丈夫～」

「『コンドル』」

「よく分かってんじゃん」

この二人はＮｏ．００７、００８、００９について色々な事を語っていた

この今あげたヤツらが運営するもの全てが暗部である

他に０１３や０１９を中心として活動する暗部もあるが　、余り名は知れていないのだ

『スタート』、『ブレイク』、『コンドル』、この３つが代表的である

ピコッ、と研究室にあるパソコンが鳴る

「これは面白いですよ、氷宮さん」
そのパソコンに映し出されていた映像、それはこの研究所の近くで一人の人物が一人の青年を追いかけている光景であった
「『スタート』、かな？それとも『ブレイク』？」
「この逃げている青年…相川完か？」
「あぁ、あのこね…って事は追われているのは『スタート』のほうか…なんか珍しい」
「では追いかけている方は？」
「ん〜、……008？」
「そんなまさか、リーダーが自ら出るなんて事は…」
「真っ青な髪に前髪を縛ってサングラスかけてる子なんて008しかいなくない？」
灯はパソコンに映った映像をよーく見てみる
確かに青髪で前髪を縛っていてサングラスをかけていた
「008ですね」
「だろだろ？」
「『スタート』が『ブレイク』に追われてる、という事ですかね」
「こんな暗い時にしかもこんな時間に」

パソコンの隅の方に記載されていた時刻は午前3時を上回っていた

「それにしてもアーカイツのおかげで001の血が採れた、これで001を上回るクローンを作る事ができる」

「そうですね、アーカイツはよく頑張ってくれました」

「復讐への第一歩だ」

そう言うと氷宮は自分の顔に刻まれた×印の傷を右手で軽くさする

「楽しくなってきた……」

――とあるどこかの学区のどこかの路地裏

「何で俺っちが追われてんだよッッ！！」

その路地裏では一人の青年、相川完が逃げ惑っていた
逃げ惑う相川をどこかへ追い詰めるように追跡していく者が一人
その追跡者は真っ青な髪の色をしており、前髪を縛って他の邪魔な髪をねかしている。特徴的なのは月の反射で淡く光るそのサングラスだ

「待ちやがれｒｅっ！！」

どんどん相川と距離を縮めていく追跡者

「ちくしょうこのままじゃ…」

ririririririri

相川のポケットからどこかで聞いたことがあるような機械音が聞こえる

慌ててポケットから携帯を取り出し耳に当てる

「もしもし俺っち相川完、どうぞ」

『もしもしこちら使徒、大丈夫？どうぞ〜』

「このおっとりとした喋り方は、リーダーか！！何のよう？俺っち今大ピンチなの、分かる？」

『分かってるよ〜、ていうかガスマスクかなんかした方がいいよ〜』

「リーダー？まさか？てか近くにいるの」

『いくよ〜』

完の周りに紫色の煙が立ちこめる。この紫色の煙は簡単に言うと

「仲間に毒ガス使いますかねぇぇぇっっ！！？？普通！！」

毒ガスだ

完はその場で立ち止まり、ポケットなどをめちゃくちゃに漁る。そしてポケットの中から一つの希望を見つける

「良かったぁ〜、まだあったよ〜」

それは対毒ガス用に作られたマスクであった

完が立ち止まった時に、追跡者もその場で立ち止まった

「……使徒のやろうか…まあいいや、今日は帰るとするｋａ」

その追跡者は体がいきなり溶け始め、水となりその場から姿を消した

完はマスクを急いでマスクをつけ、後ろを振り向く。追跡者がいない事を確認して安堵の息をつく

そして手に持っていた携帯に向けて怒鳴りつける

「リーダーっっっ！！！！」

『ツー、ツー、ツー』

もう電話の向こうの人は　通話を切ったようだ

「帰ったらリーダーに問いつめてやる」

携帯を閉じ、ポケットにしまうと今走ってきた路地裏を逆戻りし始める

あれから（後書き）

これから暗部の話になります。
多分主人公の出番は先になりますね……
ごめんなさい

今後とも宜しくです

『白夜の涙』（前書き）

すみませんかなり遅れました。
今回の話は新キャラ続々登場なので何かと大変でした。

『白夜の涙』

8月10日
とある学区の『スタート』基地
そこでは暗部『スタート　』が会議？らしき事をしていた

「新しい仕事だよ～」

「リーダー、何の仕事ですか？」

相川完（あいかわかん）が『スタート』のリーダーである血波使徒（ちなみしと）に問いかける

「何だかどこかの暗部からある博物館への犯行予告がキタらしいから～、それの阻止かなぁ～」
「その暗部って『ブレイク』ですか？」

「その可能性はあんまりないね～、てか0に等しいよ～、だって『ブレイク』は『暗部潰し』を目的としてるんだよ～、変に博物館なんて襲わないでしょ～？」

「それもそうですね…、てかあとの二人はどこに行ったんですか？」

この『スタート』のメンバーは全員で4人である。今、この基地には使徒と完しかいないのだ

「赤井くんと落合くんはもうその博物館に行ったよ～」

「はやっ！！！！」

「だから完くんはここにいていいからね～」

「は…はぁ……」

――

一方その頃博物館…

「この博物館に犯行予告があったんだよね～」

「…そうだ」

赤井雄大（せきいゆうた）と落合竜平（おちあいりゅうへい）はここ、博物館に来ていた
この博物館には『白夜の涙』という簡単に言うと悪いヤツらが狙うお宝がある
今回はその『白夜の涙』　は能力者迎撃装置などで厳重に保管してある
普通なら見れない物なのだが今日に限っては来場者公開なのだ
その事を頭に入れての犯行予告なのだろう

「何で俺達『スタート』がこんな事しなくちゃなんないの～」

「兄貴の命令だ。それに従おう」

「それもそうだね…」

そうこう二人が会話をしている内に目的の『白夜の涙』が展示している場所にたどり着いた

「これが『白夜の涙』か……」

「綺麗だ…」

その『白夜の涙』は頑丈なケースで覆われていて、そのケースをまた覆うケースがある。いわゆる二重構成だ
『白夜の涙』は雫の形をした小さな宝石である
手のひらにちょこんとのるくらいの大きさであろう
何分間か竜平と赤井が『白夜の涙』に見つめていると、

ガシャッ

という音がなり、博物館全体の光が消えた

「停電かな？」

「なるほど…『白夜の涙』を守るぞ！！」

だが気づくのが遅かった　。消えた電気は再び光を取り戻し辺りを明るく照らした

「あ………」

「遅かったな…」

さっきまでそこにあった　『白夜の涙』が綺麗サッパリ、ケースを

傷つけずに無くなっていたのだ

『ははははっ！！！白夜の涙はアタイがいただいたよ！！！』

どこからか女の子の声が聞こえてきた

ガチャン！！

とドアが閉まる音

「行くぞ赤井！！」

「分かってるよ！！」

竜平と赤井は勢いよく博物館から飛び出して女の子を追いかけた

博物館から出て数キロメートルは長い長い一本道である

そして一本道の周りには大きな併があり、例外を覗いては絶対に人間が登れない大きさだ

走る二人に一人の男が立ち塞がった

「ここから先は行かせん」

「あんた誰？」

「俺は千拓斗(せんたくと)。『ブレイク』の構成員だ」

『ブレイク』という言葉に竜平と赤井は目を丸くする

『ブレイク』…それは暗部を潰すために生まれた暗部…

そう、竜平や赤井達の所属する『スタート』は暗部である

つまり、赤井達にとって『ブレイク』とは天敵以外の何者でもないのだ

「おいおい『ブレイク』さんが何の用だよ？」

「第一目的はお前達『スタート』を潰す事」

冷静かつ冷たい声で竜平と赤井に向かって言い放つ

「第二目的は『白夜の涙』を『スタート』に渡さない事」

「なるほど…つまり俺達の邪魔をしたいと？」

「そういう事だ」

はぁ〜、と赤井はため息をつくと竜平に向かって「ここは俺が引き受ける、竜ちゃんは先行って」と言う

「最初からそのつもりだ」

「酷い人だ」

笑い混じりに赤井がそう言うと赤井は拓斗に向かって突っ込む

「俺に向かってくるか…」

その赤井の突っ込みを両手で抑える拓斗

「今だっっ！！！」

「分かってる」

拓斗と赤井の横を一気に突っ切って、そのまま軌道にのり一本道を突き進む

「頼んだ！」

「オーケー！！」

赤井は拓斗の懐から離れ、後方へと距離をとる

「一人ぐらい別にいい」

「負け惜しみかな？」

「いや、お前がここに残ったのは運がいい」

なに？、と少し怒りまじりに聞く赤井

「あの男が行った先には、００８がいる」

「…………！！！」

赤井が００８と聞いた瞬間に硬直した。何故なら００８と呼ばれる能力者に覚えがあるからだ

「俺があっちに行くべきだったな」

「お前は私に殺されるより００８に殺された方がいいというのか」

勝手に言ってろ、と拓斗に向かって言い捨てる

「まぁいいや、そろそろ始めましょうか」

――

一方その頃『白夜の涙』を盗んだ『自称お宝ハンター』は長い長い一本道を走り続けていた

「追って来てないかな？」

そんな事を考えながらひたすら走る『自称お宝ハンター』こと羽鳶胡蝶

目には蝶の形をモチーフにしたマスクがかかっていた

その羽鳶胡蝶に暗部からの刺客が現れる

胡蝶の逃げるための一本道のど真ん中に立ち往生するその女

「それ、『コンドル』に、必要、こっちに、渡して」

いちいち区切って喋るこの女

この女、『コンドル』の構成員である

『コンドル』とは軌跡や赤井や緑などが昔にいた研究所のために作られた暗部である

「アナタ誰っ！？てか、これは渡さないから！！」

「お願い、渡して、私、戦い、したく、ない」

この『コンドル』の構成員である成宮叶恵は１４０前後である小さな身長から胡蝶を見つめている

一方胡蝶は邪魔な髪をお団子で結んだ髪の毛をかいて「困ったな～」

と言い捨てる

「でも…アタイはこのお宝を渡すつもりはないっ！！！」

「仕方、ない、やはり、戦うしか、ないのね」

───

一方、赤井をおいて『白夜の涙』を盗んだ女…胡蝶を追っていた竜平だがあの青年、拓斗の言った通り００８に出くわしていた

「『ブレイク』のリーダーが来るなんて聞いてないぞ」

「暗部関わる事件に、『ブレイク』は必ず現れるんだＹＯ」

「００８…海花井悟（うみかいさとる）、兄貴の戦友と聞いていたがこんなチャラチャラしたヤツだったとは」

竜平がそう思うのも無理はない。前髪を上で縛り、サングラスをかけ、両手をポケットに突っ込み、ダボダボの服を着ている。一般的から見たら不良としか思えないだろう

「酷いな〜、少なくとも使徒（しと）と錬（れん）とは同等…いや、それ以上には戦えるｎｅ！」

見た目から見ると赤井や軌跡、使徒は同い年に見える容姿なのだが、ポケットからタバコを一本取り出し、ライターで火をつける

「あなた未成年者でしょ？」

悟は一瞬時が止まったように硬直する

「大丈夫でｓｈｏ？」

「ダメだ、これで立派な不良の完成だ」

「まあまあまあ！いいじゃないｎｏ！」

そう言うと悟はタバコの火が灯っている方を唇に当てる
普通なら唇は火傷する筈だが、悟は普通ではないためそのタバコの
火は一瞬にして消えた
タバコを地面に捨て、足で踏んづけグシャグシャにした

「さて、始めましょうｋａ！！」

『白夜の涙』（後書き）

新キャラ出しすぎましたかね………はい

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7631n/

とある記憶の絶対領域（アブソリュート）

2011年2月5日20時06分発行